

2.3 自然的状況

2.3.1 気象の状況

「穂高町誌 自然編」(平成3年1月穂高町誌編纂委員会)によると、安曇野市は内陸性の気候であり、気温の年較差、日較差が大きい特徴がある。風向は穂高地区では年間を通して北北西の風が主であり、次いで北西の風が多い。4月、5月には風が強く、6月、10月に風が弱い。

対象事業実施区域に近い地域気象観測所は穂高気象観測所であり、他に松本地域気象観測所及び大町地域気象観測所がある。気象観測結果を表2.3.1に、地域気象観測所の位置図を図2.3.1に、平均気温及び降水量の月別の平年値を図2.3.2に、松本地域気象観測所における風向別出現頻度を図2.3.3に示す。

穂高気象観測所の気象観測結果では、平均風速の平年値は1.0～1.7m/sであり、風は春に強く秋に弱い傾向がある。年間の降水量の平年値は1,064.8mmである。

穂高気象観測所では風向のデータはないため、松本地域気象観測所のデータをみると、北～北北西及び南～南南東の風が多くなっている。

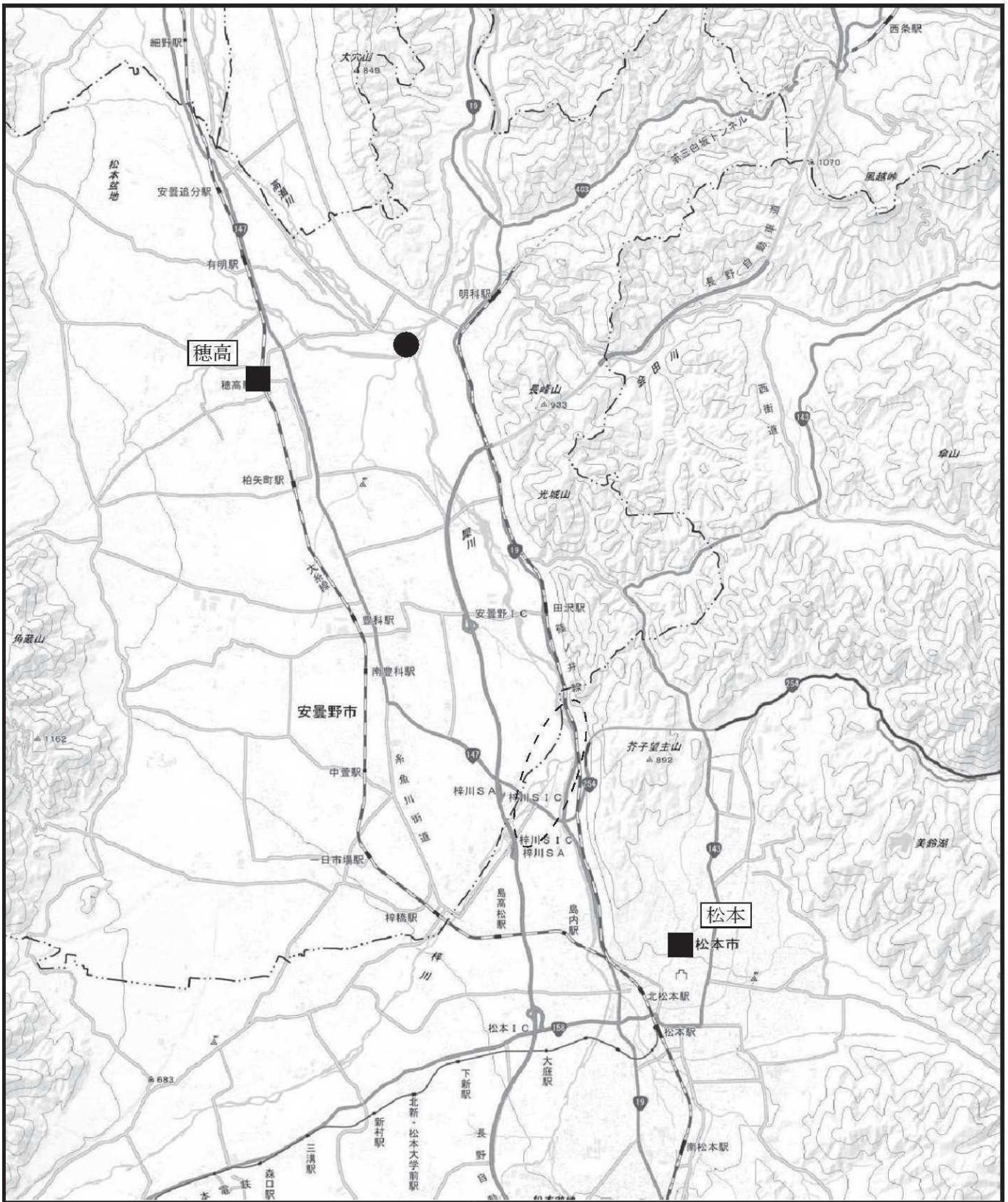
表 2.3.1 気象観測結果 (穂高気象観測所)

	平均気温(°C)		平均風速(m/s)		降水量(mm)	
	平年値	平成25年	平年値	平成25年	平年値	平成25年
1月	-0.9	-1.2	1.2	1.4	40.5	25.0 ^{注1}
2月	-0.3	-1.5	1.3	1.3	47.8	97.5
3月	3.6	3.9	1.5	1.6	84.9	118
4月	10.3	9.7	1.7	1.5	76.9	48.5
5月	15.8	16	1.6	1.9	101.6	39.5
6月	19.7	20.3	1.3	1.4	131.6	87.5
7月	23.3	23.6	1.3	1.5	141.2	137.5
8月	24.5	23.6	1.3	1.6	96.5	176
9月	19.9	18.4	1.2	1.4	149.7	41.5
10月	13.1	13.2	1.0	1.4	103.8	164
11月	6.9	7.5	1.1	1.2	57.8	71
12月	1.8	0.6	1.2	1.5	32.6	68
年間 ^{注2}	11.5	—	1.3	—	1064.8	—

注1) 準正常値。品質に軽微な問題があるか、または統計値を求める対象となる資料の一部が許容する範囲内で欠けている場合を示す。

注2) 平年値は1981年～2010年までの30年間の統計によるものを示す。

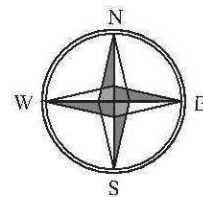
出典:「気象庁ホームページ(気象統計情報)」



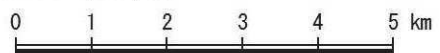
凡 例

- 対象事業実施区域
- 気象観測所

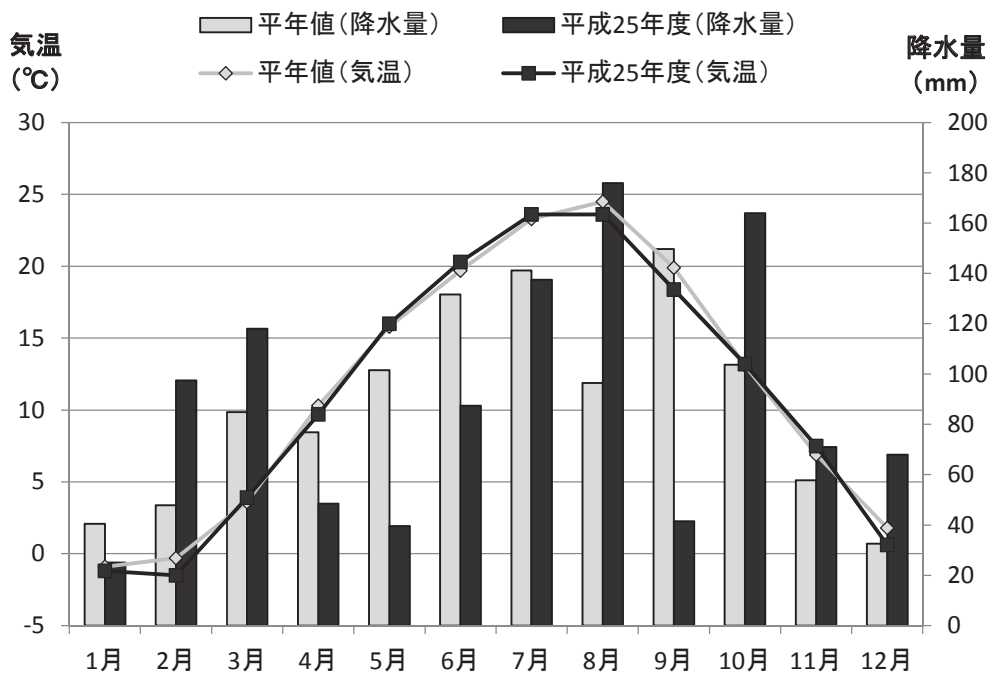
図2.3.1 気象観測所位置図



Scale 1/100,000

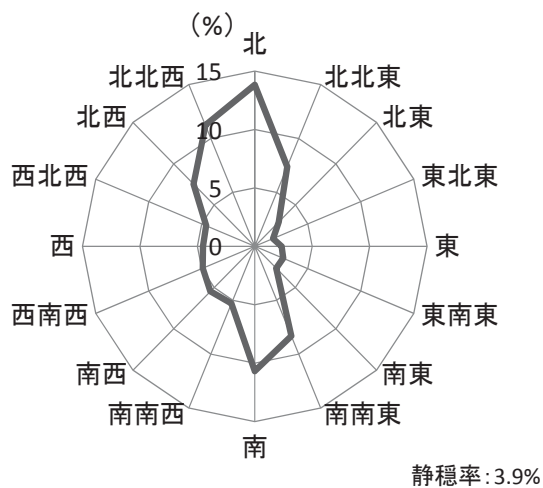


この地図は、国土地理院ホームページ「地理院地図（電子国土Web）」を基に作成した。



注) 平均気温及び降水量は 1981 年～2010 年までの 30 年間の統計による平年値。
 出典：「気象庁ホームページ(気象統計情報)」

図 2.3.2 穂高地域気象観測所における月別の平均気温・降水量



注 1) 静穏率：風速 0.3m/s 未満の風の割合。
 注 2) 風向別出現頻度は 1981 年～2010 年までの 30 年間の統計による。
 出典：「気象庁ホームページ(気象統計情報)」

図 2.3.3 松本地域気象観測所における風向別出現頻度

2.3.2 水象の状況

(1) 河川、湖沼及びため池

「土地分類基本調査（信濃池田）」（2008 長野県）によると、対象事業実施区域周辺の水系は、信濃川上流の犀川水系に属している。高瀬川は北アルプスから流れてきた川で、大町市から安曇野市明科に向けてほぼ南に流れている。松本盆地の西方は北アルプスの前縁山地でやや急峻な山地となっている。この山地にV字谷をつくって東に流れた川は、盆地に入ったところで大きな扇状地を形成している。中房川などのこのような河川は、烏川と合流し穂高川となり、盆地の出口のところで高瀬川と合流する。松本盆地の最低部となる明科では、高瀬川、穂高川が南から流れてきた犀川と合流する。

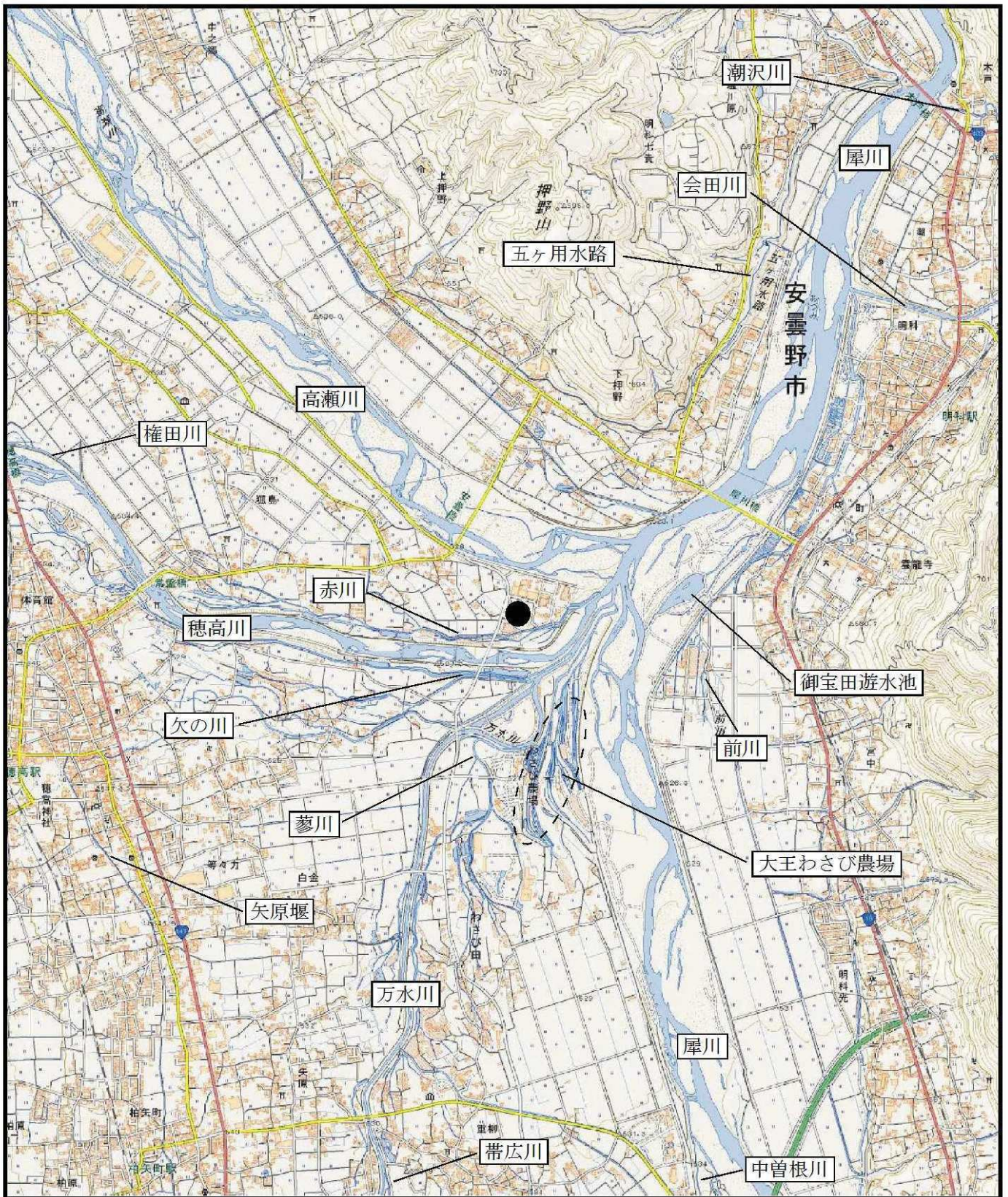
主な河川の概要を表 2.3.2 に示す。また、対象事業実施区域及びその周囲における主要な河川及びため池の状況を図 2.3.4 に示す。

なお、対象事業実施区域及びその周囲には湖沼はない。

表 2.3.2 主な河川の概要

河川名(水系名)	河川法の区分	延長(m)
穂高川	1級河川	27,795.0
万水川	1級河川	7,700.0
欠の川	1級河川	2,500.0
帯広川	1級河川	391.0
	準用河川	729.0
中曽根川	1級河川	2,147.0
	準用河川	2,420.0
潮沢川	1級河川	5,559.0
会田川	1級河川	16,181.0
赤川	準用河川	1,750.0
権田川	準用河川	1,030.0

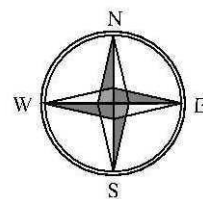
出典:「安曇野建設事務所管内図」(平成 19 年 3 月 長野県安曇野建設事務所)



凡 例

● 対象事業実施区域

図2.3.4 河川等の状況



Scale 1/25,000
 0 500 1,000 1,500m

この地図は、国土地理院ホームページ「地理院地図（電子国土Web）」を基に作成した。
 出典：「安曇野建設事務所管内図」（平成19年3月 長野県安曇野建設事務所）、「平成26年度 河川及び主要水路水質検査結果」（安曇野市）

(2) 用排水路

安曇野市ホームページ「“安曇野の文化遺産” 大地を潤す堰（農業用水路）」によると、対象事業実施区域の周囲の主な用水路としては、矢原堰及び五ヶ用水がある。位置は図 2.3.4（既出）に示すとおり。

対象事業実施区域周囲の沖積面では豊富な地下水を利用してわさびの栽培やマスの養殖が盛んである。特に穂高周辺では平野の標高が低いことと穂高川の扇状地の不圧地下水が豊富なことから、河川沿いで盛んに湧水が噴出している。「穂高町誌 自然編」（平成 3 年 1 月穂高町誌編纂委員会）によると、穂高川、万水川、高瀬川が合流する地域では、一日の湧水量が 115,000t と推定されている。

「犀川上流域の水環境シミュレーション（試算）」（平成 23 年 国土交通省千曲川河川事務所）によると、昭和 51 年から平成 18 年までの 30 年間に、水田の涵養量が 13.9 億 m³/年から 8.3 億 m³/年まで減少し、三川合流部付近の地下水位は 0.2m 程度低下したと試算している。水田涵養の減少が盆地の地下水低下傾向と関係している可能性があるとしている。

2.3.3 地象の状況

対象事業実施区域は松本盆地の中央部に位置している。「土地分類基本調査（信濃池田）」（2008 長野県）によると、松本盆地、犀川、麻績川に囲まれた地域が筑摩山地であり、新第三紀の堆積物からなる。標高は 600～1,000m である。西側の山地は、飛騨山地の東端部であり、槍～穂高連邦の前山にあたる山地である。飛騨山地は東側の山地より急峻で、標高は 700～2,400m である。

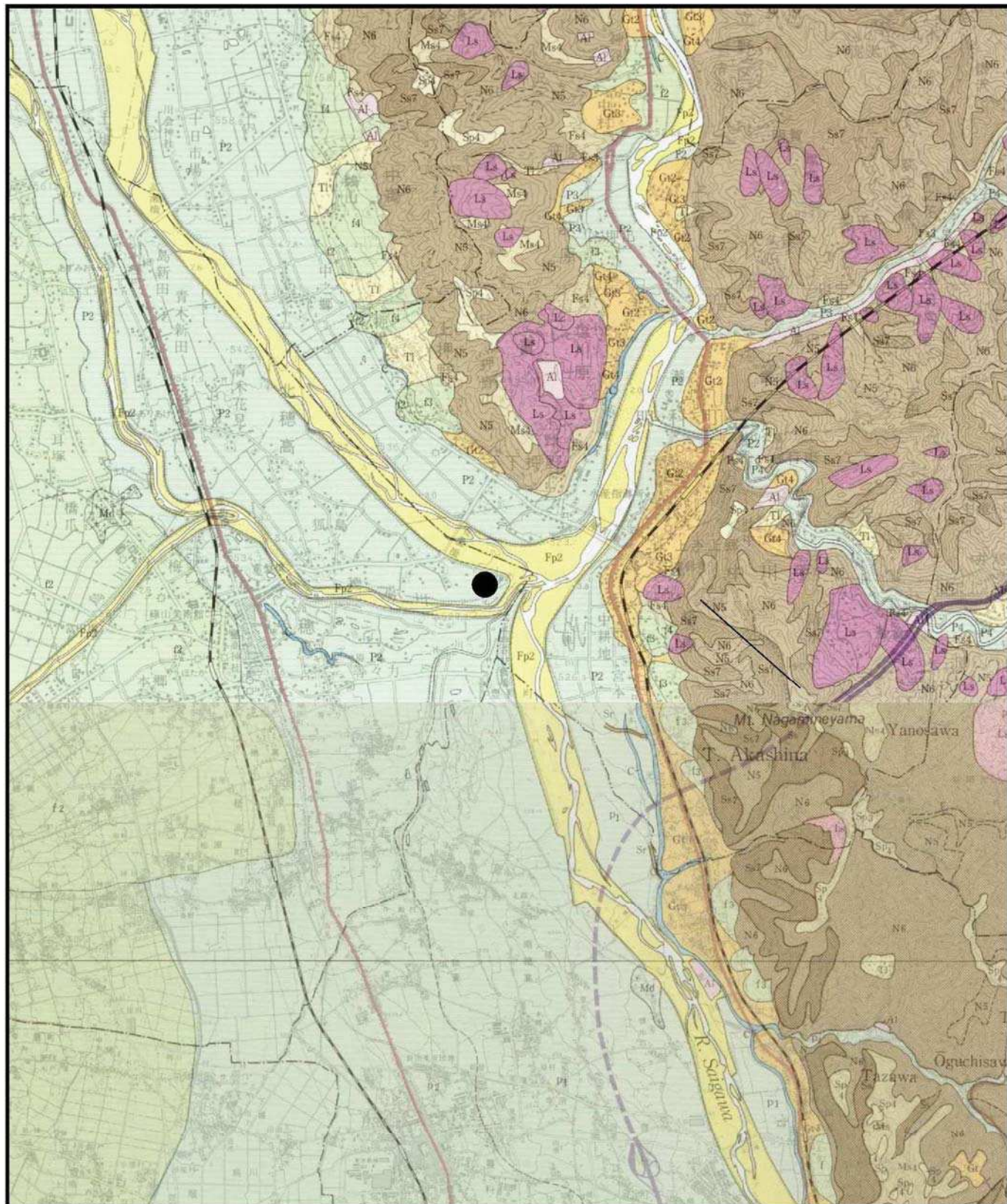
飛騨山地と松本盆地の境界部は、飛騨山地からの河川による大きな扇状地が形成されている。これらの扇状地を形成した河川は、松本盆地を横切らず、北から順番に合流し、烏川と合流し穂高川となり明科で高瀬川、犀川と合流する。

(1) 地形

対象事業実施区域及びその周囲における地形分類の状況を図 2.3.5 に示す。「土地分類基本調査図 地形分類図 松本」（平成 16 年 国土交通省）によると、対象事業実施区域の地形分類は谷底平野である。

(2) 地質

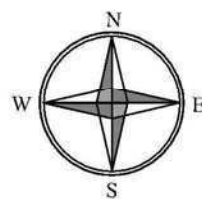
対象事業実施区域及びその周囲における表層地質の状況を図 2.3.6 に示す。「土地分類基本調査図 表層地質図 松本」（平成 16 年 国土交通省）によると、対象事業実施区域の表層地質は完新統であり、犀川などの河川沿いに広く分布している。



凡 例

● 対象事業実施区域

図2.3.5 (1) 地形分類の状況



Scale 1/50,000
0 1,000 2,000 3,000m

出典：(上図) 「土地分類基本調査図 地形分類図 信濃池田」(平成16年 国土交通省)
(下図) 「土地分類基本調査図 地形分類図 松本」(昭和62年 国土庁)

凡例(上图:信濃池田)

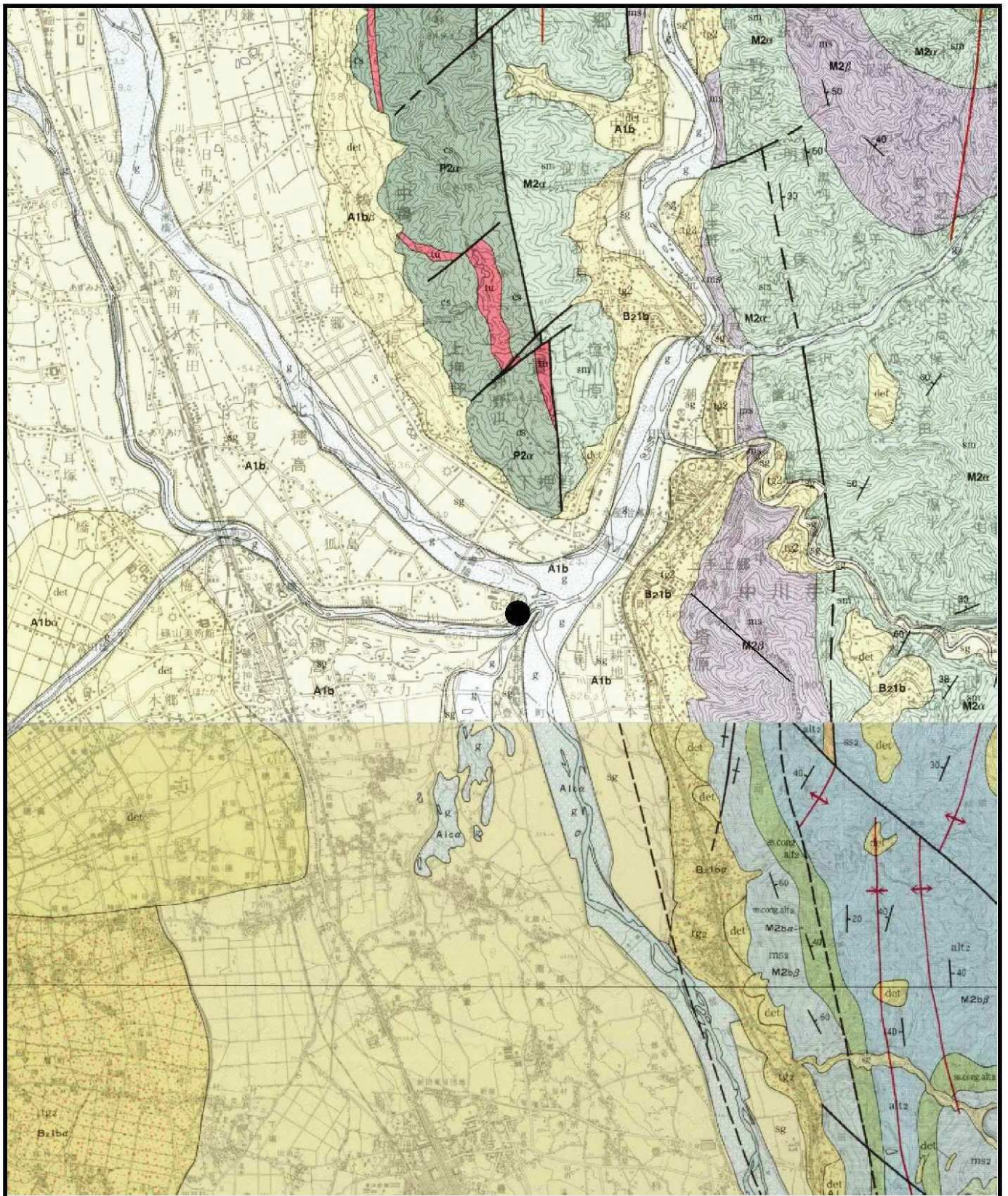


図 2.3.5 (2) 地形分類の状況

凡例(下図:松本)



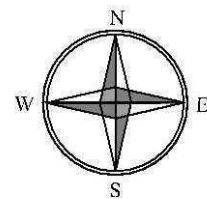
図 2.3.5 (3) 地形分類の状況



凡 例

● 対象事業実施区域

図2.3.6 (1) 表層地質の状況



Scale 1/50,000
0 1,000 2,000 3,000m

出典：(上図)「土地分類基本調査図 表層地質図 信濃池田」(平成16年 国土交通省)
(下図)「土地分類基本調査図 表層地質図 松本」(昭和62年 国土庁)

凡例(上図 信濃池田)

未固結堆積物 Unconsolidated sediments	g	礫がち堆積物 (現河床堆積物) Gravel-rich sediments (Present riverbed deposits)	岩体のかたさ Hardness of rock mass	1	軟 (弾性波速度1.5km/sec未満) Soft	
	p	泥炭・泥炭質シルト (湿地堆積物) Peat and peaty silt (Marsh deposits)				
	sg	砂礫Ⅳ (完新統) Sand and gravel IV (Holocene)				
		tg2	砂礫Ⅲ (最低位段丘群堆積物・完新統) Sand and gravel III (Lowest terraces sediments, Holocene)	2	中 (弾性波速度1.5~3km/sec) Medium	
		tg1	砂礫Ⅱ (低位段丘堆積物) Sand and gravel II (Lower terrace sediments)			
		tg0	砂礫Ⅰ (中位段丘堆積物) Sand and gravel I (Middle terrace sediments)			
	半固結堆積物 Semi-consolidated sediments	mg	砂・礫・シルト (中部更新統) Sand, gravel and silt (Middle Pleistocene)	岩体のかたさ Hardness of rock mass	3	硬 (弾性波速度3km/sec以上) Hard
		det	砕屑物Ⅱ (地すべり・崖錐・崩壊堆積物) Detritus II (Landslide, talus and collapse deposits)			
		dcd	砕屑物Ⅰ (地すべり・崖錐・崩壊堆積物) Detritus I (Landslide, talus and collapse deposits)			
		cs	礫岩・砂岩 (鮮新統) Conglomerate and sandstone (Pliocene Series)	岩片のかたさ Hardness of rock materials	1	軟 (弾性波速度1.5km/sec未満) Soft
		tu	凝灰岩 (鮮新統) Tuff (Pliocene Series)			
固結堆積物 Consolidated sediments		ms	泥岩 (第三系) Mudstone (Tertiary System)	a	軟 (耐圧強度100kg/cm ² 未満) Soft	
		sm	砂岩泥岩互層 Sandstone and mudstone alternation (Tertiary System)			
		ss	砂岩 (第三系) Sandstone (Tertiary System)			
		sc	砂岩・礫岩・凝灰岩 (第三系) Sandstone, conglomerate and tuff (Tertiary System)	b	中 (耐圧強度100~400kg/cm ²) Medium	
火山性岩石 Volcanic rocks	mp	Sandstone, shale and chart (Permian-Jurassic System)	c	硬 (耐圧強度400kg/cm ² 以上) Hard		
	ls	石灰岩 (二畳~ジュラ系) Limestone (Permian-Jurassic System)				
		rtp	流紋岩質溶岩・火砕岩・凝灰岩 Rhyorite lava, pyroclastics and tuff	風化体の深度 Depth of weathered crust	α	浅い (約3m以浅) Shallow
		wd	デイサイト溶岩・溶結凝灰岩 Dacite lava and welded tuff			
		atp	安山岩溶岩・火砕岩 Andesite lava and pyroclastics			
			ry	流紋岩 (貫入岩) Rhyorite (Intrusive rocks)	β	中程度 (約3~10m) Medium
			pa	ひん岩~安山岩 (貫入岩) Porphyrite-andesite (Intrusive rocks)		
	深成岩 Plutonic rocks	gd	閃緑岩・トーナル岩類 Diorite and tonalites	γ	深い (約10m以深) Deep	
gr		花崗岩 Granite				
変成岩 Metamorphic rock	hf	ホルンフェルス Hornfels				

図 2.3.6 (2) 表層地質の状況

凡例(下図 松本)



図 2.3.6 (3) 表層地質の状況

(3) 注目すべき地形・地質

「日本の地形レッドデータブック（第1集）危機にある地形」（2000年 古今書院）によると、対象事業実施区域及びその周囲には保存すべき地形はない。

(4) 対象事業実施区域周辺の地質調査結果

対象事業実施区域周辺では、穂高クリーンセンターの敷地内に井戸を設置した際に地質調査が実施されている。地質調査の結果を図 2.3.7 に、地質調査の位置を図 2.3.8 に示す。

対象事業実施区域周辺の地質は砂礫、礫混じり粗砂及びシルト混じり粗砂からなっている。砂礫層及び礫混じり粗砂層が帯水層を形成しており、それに対し、シルト混じり砂礫層は相対的不透水層を形成している。

自然水位は 2.7m 程度である。

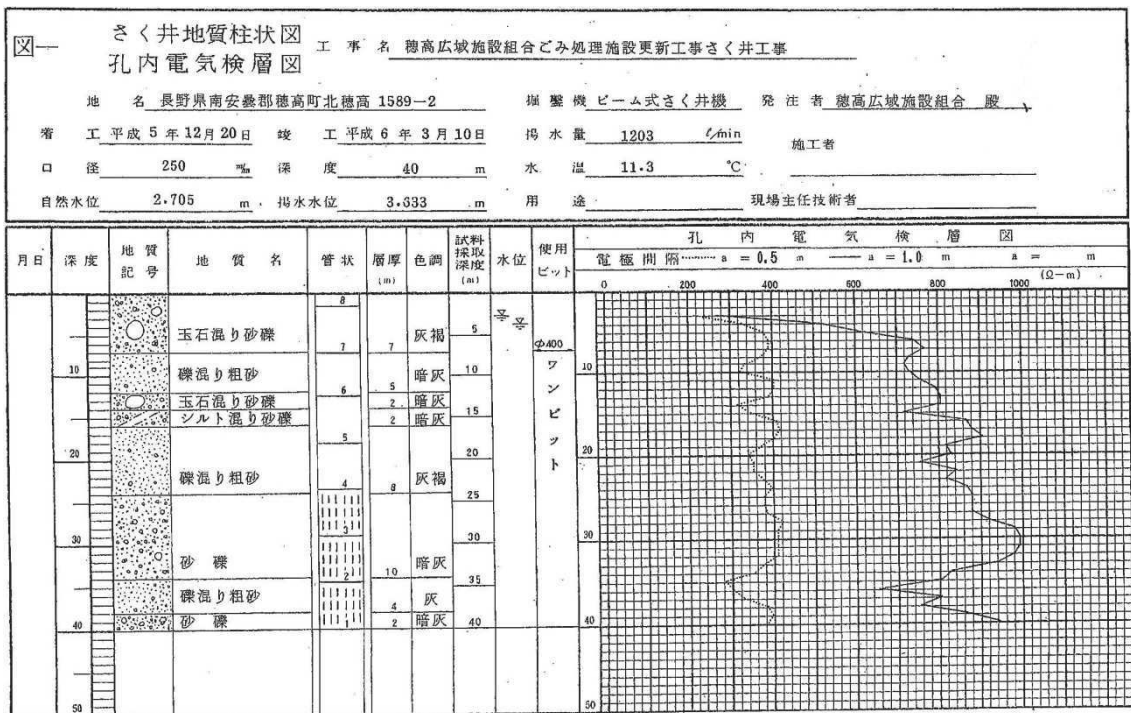
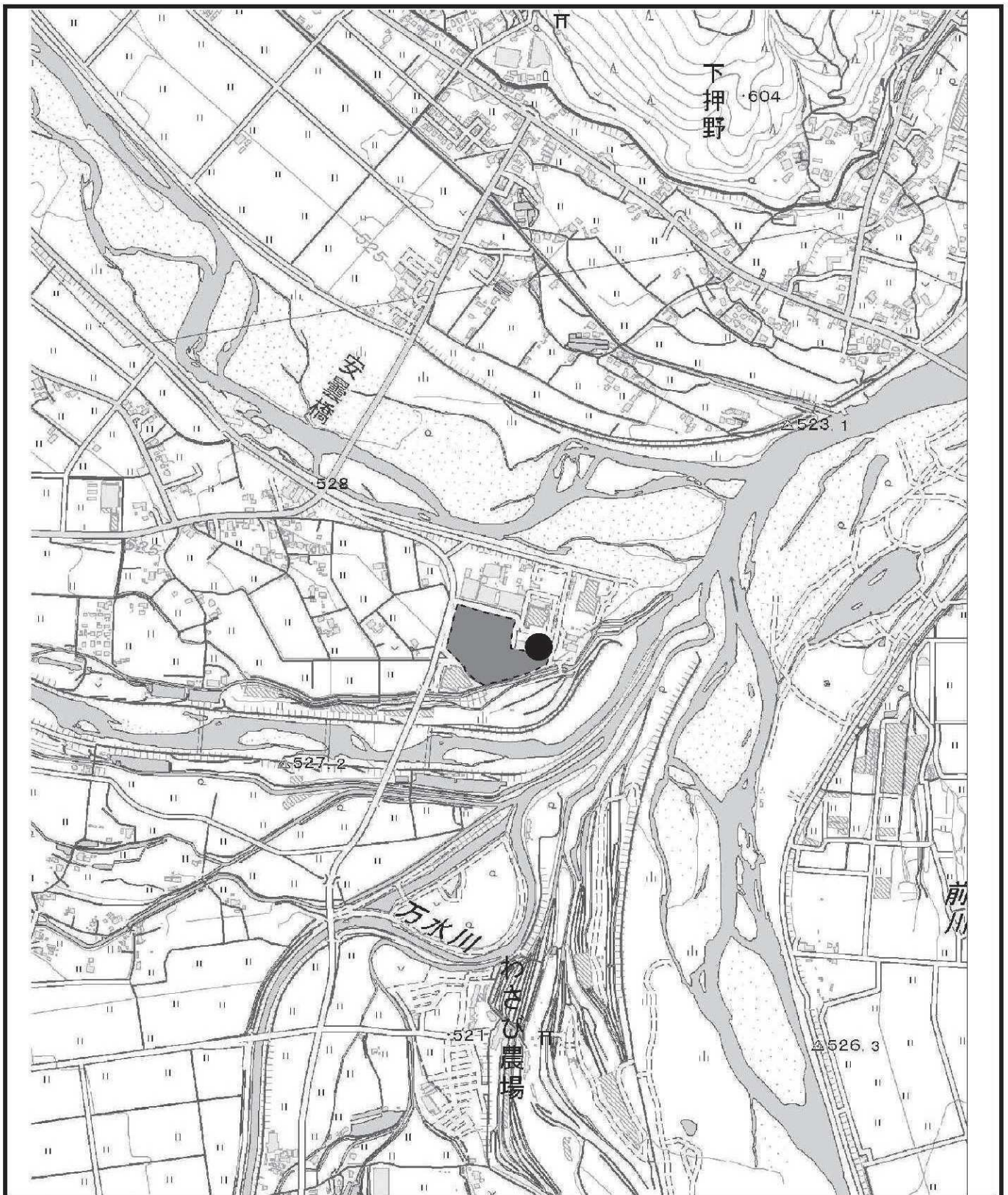


図 2.3.7 地質調査結果



凡 例



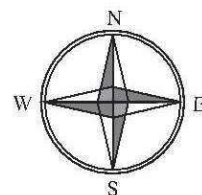
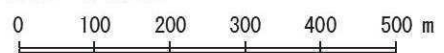
-  対象事業実施区域
-  地質調査地点

図2.3.8 地質調査地点位置図



Scale 1/10,000



(5)活断層

対象事業実施区域及びその周囲の活断層の状況を表 2.3.3 及び図 2.3.9 に示す。

対象事業実施区域の東側には、松本盆地の東縁を南北に走る松本盆地東縁断層がある。

表 2.3.3(1) 活断層の状況

1	神城断層
2	鹿島川沿い
3	松本盆地東縁断層
4	寺海戸断層
5	常念岳断層
6	松本市中山丘陵東側
7	牛伏寺断層
8	赤木山断層
40	信濃坂断層

注 1) 表中の番号は図 2.3.9 に対応している。

注 2) 松本盆地周辺の断層のみ抜粋。

出典：「(<新編>日本の活断層-分布図と資料」(1991年 東京大学出版会)

表 2.3.3(2) 活断層の状況 (詳細)

番号	断層名	確実度 ^{注1}	活動度 ^{注2}	走行	断層形態	変異基準
3	松本盆地東縁断層	II	C	NNW	高度不連続	丘陵高度
	大町市丹生子		B		断層露頭	段丘礫層
	青木湖			NS	高度不連続	湖底
	木崎		C	NS	高度不連続	湖成段丘
	池田町堀之内		B		逆むき低断層崖	扇状地

注 1) 確実度 I : 活断層であることが確実なもの、確実度 □ : 活断層であると推定されるもの

確実度 □ : 活断層の疑いのあるリニアメント

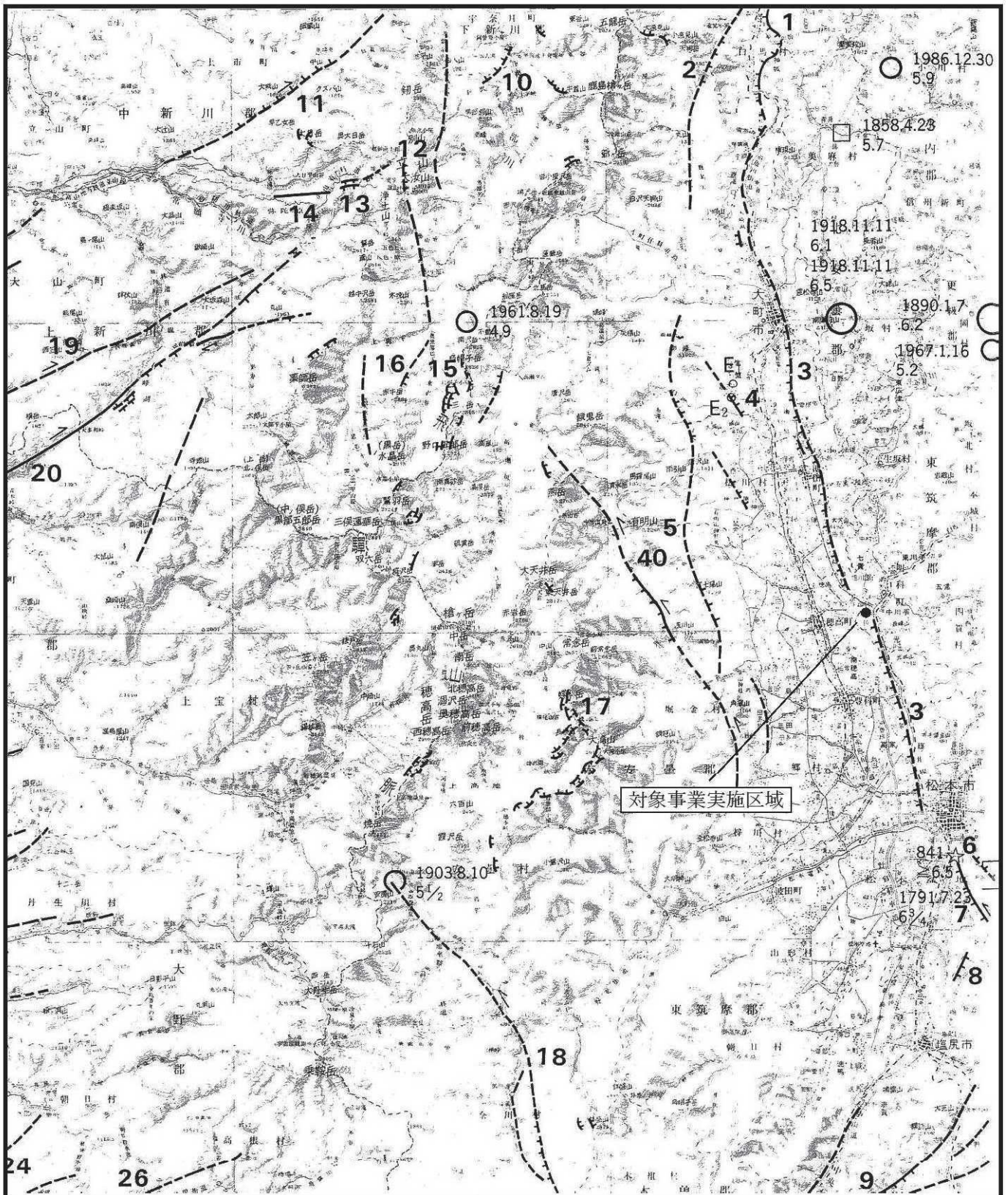
注 2) 活動度 A : 1,000年あたりの平均的なずれの量が 1m 以上 10m 未満

活動度 B : 1,000年あたりの平均的なずれの量が 10cm 以上 1m 未満

活動度 C : 1,000年あたりの平均的なずれの量が 1cm 以上 10cm 未満

注 3) 表中の番号は図 2.3.9 に対応している。

出典：「(<新編>日本の活断層-分布図と資料」(1991年 東京大学出版会)



凡例

- 陸上活断層**
- 活断層であることが確実なもの (確実度Ⅰ)
 - - - -→ 活断層であると推定されるもの (確実度Ⅱ)
 - 活断層の疑のあるリニアメント (確実度Ⅲ)
- 短線は破すれの傾下側を、矢印は破すれの向きを示す。
- 伏在断層
 - ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 地震断層
 - × 霧頭 ☆ トレンチ調査地点

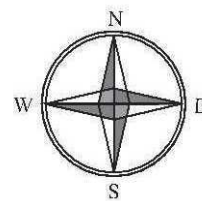
活傾動

→ 地形面の傾き下る方向

地震

- 1884年まで 1885年～1987年
- ○ M7.0以上
 - ○ M6.0～6.9
 - ○ M5.9以下
- 記号に添えた数字は発生日月とマグニチュード。太線は深さ30km以上の震央を示す。

図2.3.9 活断層の状況



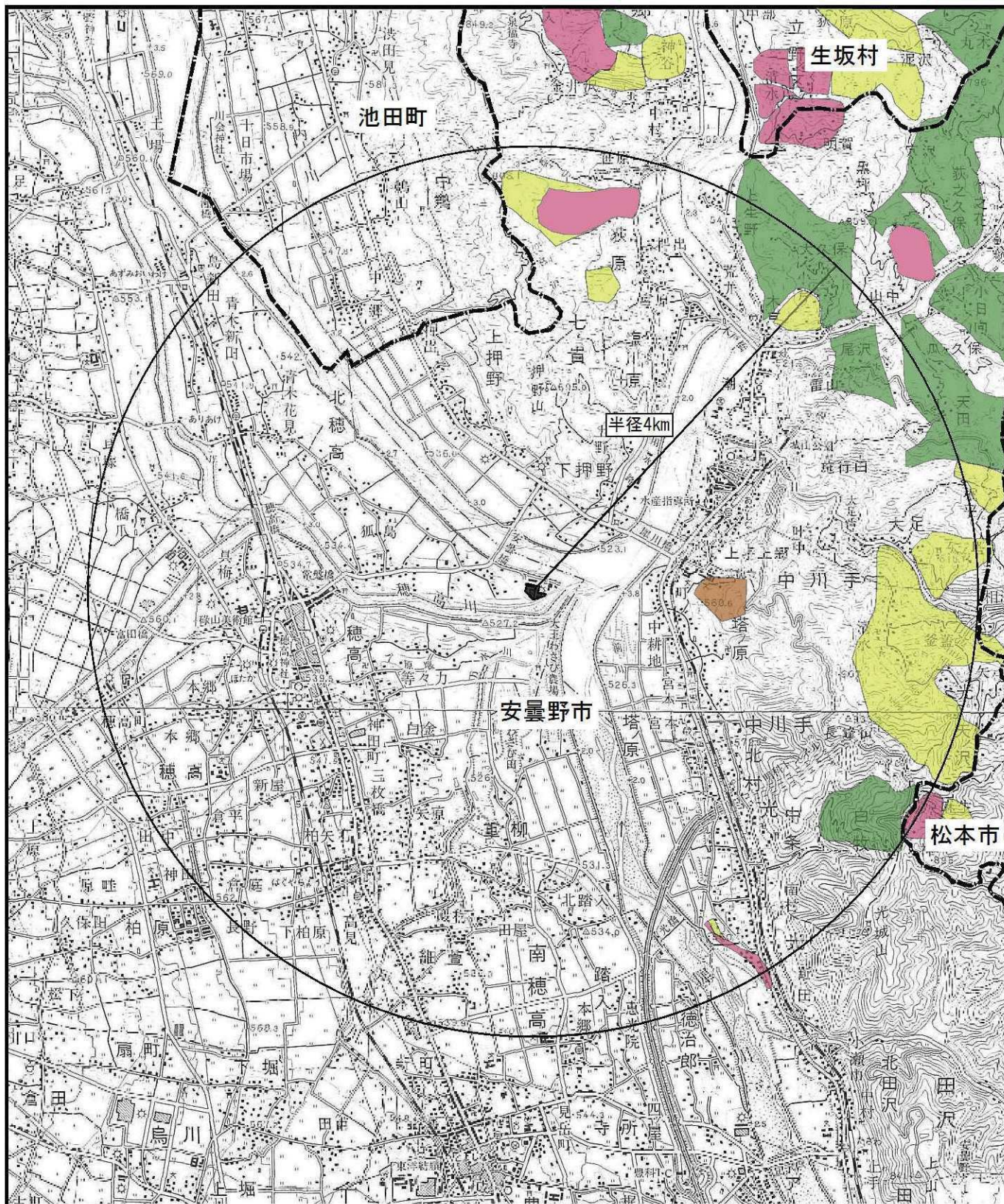
出典：「新編」日本の活断層-分布図と資料」（1991 東京大学出版会）

(6)地すべりおよび崩壊等の発生状況

対象事業実施区域及びその周囲の地すべり及び崩壊等の危険箇所の状況を図 2.3.10 及び図 2.3.11 に示す。

「洪水・土砂災害ハザードマップ 北部（穂高・明科）」（平成 23 年 安曇野市）では、概ね 100 年に 1 回程度発生する大雨（犀川、穂高川及び高瀬川については 2 日間の総雨量が 200～250mm 程度）による浸水想定をしており、対象事業実施区域では 2～5m 程度の浸水が想定されている。

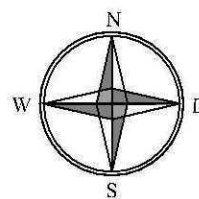
なお、対象事業実施区域内は、地すべり危険箇所及び土砂災害危険区域に含まれない。



凡 例

- 対象事業実施区域
- 地すべり危険箇所(土木)
- 地すべり防止区域(土木)
- 地すべり防止区域(農政)
- 地すべり防止区域(林務)

図2.2.10 地すべり危険箇所等の状況



Scale 1/50,000
0 1,000 2,000 3,000m

この地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図を基に作成した。
出典：長野県ホームページ「長野県統合型地理情報システム 信州くらしのマップ」

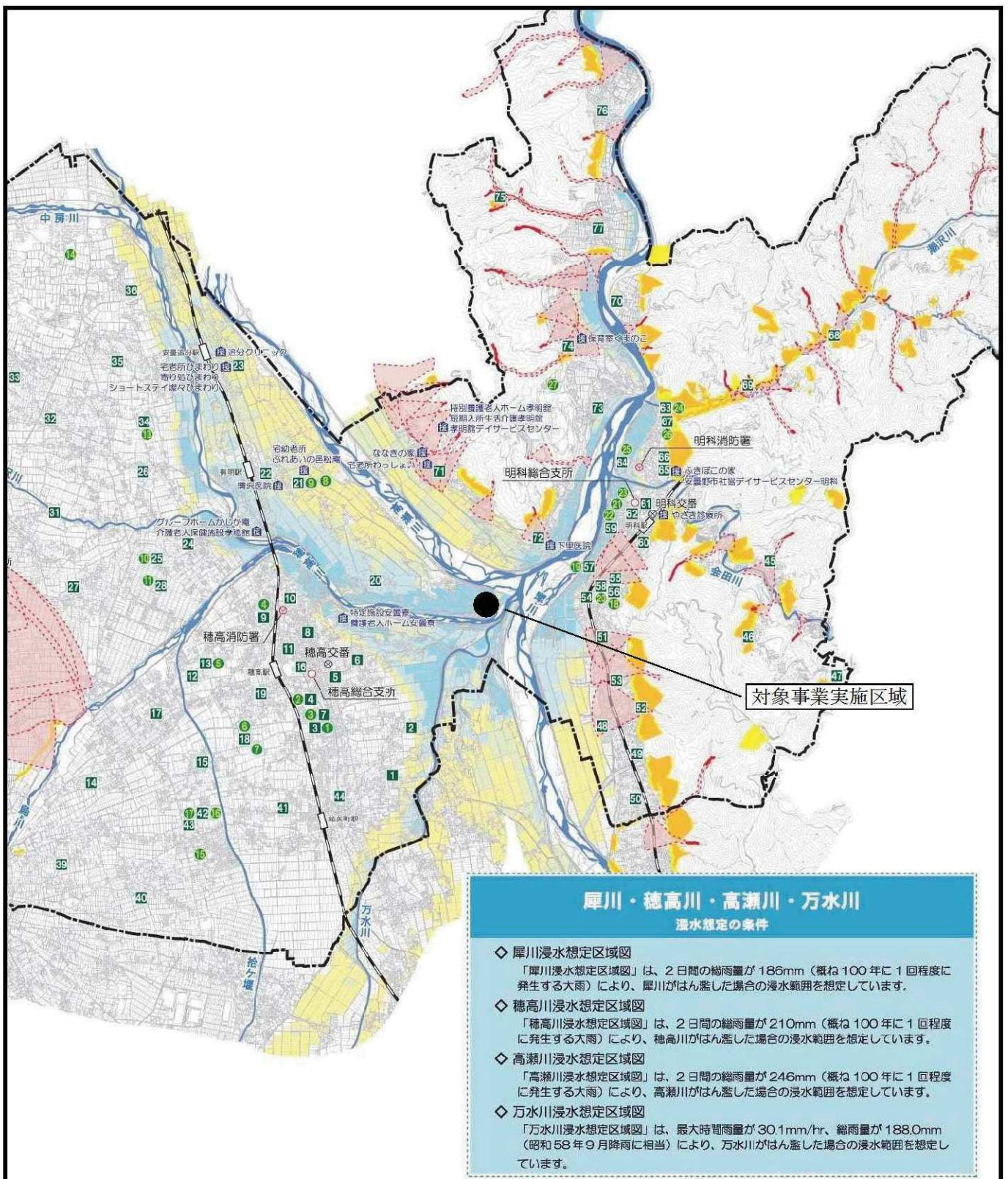
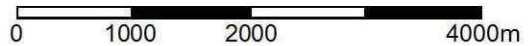
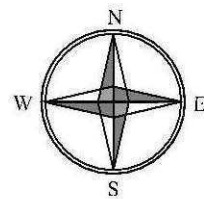


図2.3.11 土砂災害警戒区域及び浸水想定状況



注) 避難施設、及び避難場所の名称一覧は省略
出典: 洪水・土砂災害ハザードマップ 北部地域(穂高・明科) (平成23年 安曇野市)

(7)災害履歴等

対象事業実施区域のある安曇野市において、水害等の甚大な被害をもたらした災害の発生状況を表 2.3.4 に示す。

平成 8 年には対象事業実地区域近傍である万水川と穂高川合流地点の堤防が豪雨により決壊している。

表 2.3.4 安曇野市内の近年の主な災害

通称	発生日時	市内の主な被害状況
台風 7 号	昭和 34 年 8 月 13 日～ 14 日	県下に戦後最大の洪水をもたらす。県下の被害は死者 71 人、家屋の全壊 1,391 世帯、床下浸水 10,959 世帯に達した。
梅雨前線 豪雨	昭和 36 年 6 月 26 日 ～7 月 1 日	梅雨前線豪雨により、犀川、高瀬川が氾濫した。
梅雨前線 豪雨	昭和 40 年 7 月 12 日 ～月 13 日	梅雨前線の豪雨の影響により、犀川、高瀬川が氾濫した。
昭和 44 年 8 月豪雨	昭和 44 年 8 月 11 日	集中豪雨により、高瀬川が大洪水。大町市、松川村、穂高地域に被害が集中した。
昭和 45 年 6 月豪雨	昭和 45 年 6 月 15 日	梅雨前線の豪雨の影響により、高瀬川、烏川(穂高自動車教習所付近)が増水、堤防が決壊した。
台風 20 号	昭和 47 年 9 月 27 日	台風 20 号の影響により穂高地域で穂高川の堤防が決壊した
昭和 53 年 6 月豪雨	昭和 53 年 6 月 27 日	豪雨により高瀬川が増水。県道陸郷穂高線の安曇橋が一部損壊、車両通行止めとなる。
台風 18 号	昭和 57 年 9 月 11 日～ 13 日	台風 18 号の影響により県内各地に被害が発生。死者 2 人、家屋全壊 3 世帯、床下浸水 3,214 世帯に達した。明科地域潮沢地区では、土砂崩れ、地すべり被害が続発し、避難勧告が出された。
台風 10 号	昭和 58 年 9 月 28 日	台風 10 号の影響により県内各地で被害が発生。死者 9 人、家屋全壊 53 世帯、床下浸水 6,975 世帯に達した。安曇野市においても、豊科田沢地籍で国道 19 号の路肩が崩壊。明科地域で警戒水位を突破し、床上浸水 13 世帯、床下浸水 72 世帯、穂高地域でも床下浸水 33 世帯の被害を受けた。
長梅雨 +台風 6 号	昭和 60 年 7 月 9 日	梅雨前線による長雨と台風 6 号の影響で、豊科地域光地籍では、土砂崩落が発生。明科地域でも潮沢地区で土砂崩れが続発した。
平成 7 年 7 月豪雨	平成 7 年 7 月 8 日	梅雨前線の豪雨の影響により、豊科地域熊倉地籍の犀川堤防の土手が崩落した。
平成 8 年 6 月豪雨	平成 8 年 6 月 8 日	梅雨前線の豪雨の影響により、穂高地域万水川・穂高川合流地点の堤防が決壊。また、高瀬川安曇橋上流の堤防も決壊した。
台風 7 号	平成 10 年 9 月 22 日	台風 7 号の風(風速 37 メートル)による影響で、市内各地で倒木や家屋の瓦が破損するなどの被害が発生。三郷地域では収穫目のりんごが落果し、農業作物に大きな被害を受けた。
平成 11 年 6 月豪雨	平成 11 年 6 月 29 日	梅雨前線の豪雨の影響により、豊科地域細萱地区では、万水川をまたぎ矢原堰の水路を支えてきた「めがね橋」が崩壊。ほかに穂高地域では烏川富田橋下流の堤防が崩落するなど大きな被害を受けた。
台風 23 号	平成 16 年 10 月 20 日	台風 23 号による豪雨に見舞われ、市内各地で甚大な被害を受けた。明科地域では、総雨量 161 ミリを記録。床下浸水、土砂災害(国道 403 号土砂崩落、自主避難 78 名)が発生。このほか、穂高地域では、小岩岳で 50 世帯に避難勧告が出された。
平成 18 年 7 月豪雨	平成 18 年 7 月 19 日	梅雨前線の長雨により、市内全域で道路の冠水や林道の土砂崩落などの被害を受けた。明科地域(小泉・萩原・木戸地区)で避難勧告(28 世帯・88 人)が出された。このほか床下浸水 2 世帯、中房線、国道 403 号で通行止めになるなどの被害を受けた。

注)通称は、気象庁による正式な名称ではない。

出典：安曇野市ホームページ「安曇野市の近年の主な災害」

2.3.4 動植物の生息又は生育、植生及び生態系の状況

(1) 動物

1) 動物相の概要

安曇野市は、北アルプスの高山から西沢沿いの低地まで多様な環境があり、野生動物が生息するうえで貴重な自然が残されている。高山にはライチョウやタカネヒカゲなどの高山特有の動物が生息しており、山地帯から亜高山帯にかけてヤマネやヒダサンショウウオが生息している。また、山麓部には里山的環境が広がっており、多くの里山の鳥類や昆虫類を擁している。さらに、北アルプスより東へ流下する多くの河川にはカモ類をはじめとする水辺の鳥類や魚類、水生生物が多くみられる。

2) 注目すべき動物

対象事業実施区域を含む安曇野市内で確認された注目すべき動物を表 2.3.5 に示す。

哺乳類 14 種、鳥類 36 種、爬虫類 2 種、両生類 6 種、魚類 8 種、昆虫類は 247 種、その他の無脊椎動物は 14 種が挙げられる。

3) 動物からみた対象事業実施区域の位置付け

対象事業実施区域は、現状でグラウンド等として利用されている既に改変された場所であるため、対象事業実施区域内に生息する動物は極めて限られる。しかし、高瀬川、穂高川、犀川の三川合流地域に位置し、周辺の河川や湧水に豊かな自然環境を残しており、河川や水辺に生息する動物の生息域に接している。

表 2.3.5 (1) 調査範囲を含む地域における注目すべき動物（哺乳類）

目名	科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}					
			A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥
モグラ	トガリネズミ	アズミトガリネズミ	○					NT	VU	VU	
		ホンシュウトガリネズミ*	○	○					NT	NT	
		カワネズミ	○	○					NT	NT	
	モグラ	ミズラモグラ	○	○				NT	VU	VU	
コウモリ	ヒナコウモリ	シナノホオヒゲコウモリ	○						EN	DD	
		モモジロコウモリ	○							NT	
		ヤマコウモリ	○	○				VU	VU	NT	
		ニホンウサギコウモリ	○	○					VU	NT	
		ニホンコテングコウモリ	○						EN	DD	
		ニホンテングコウモリ	○							DD	
ネズミ	リス	ニホンモモンガ*	○	○		県天			NT	NT	
	ヤマネ	ヤマネ	○	○		国天			NT	NT	
ネコ	イタチ	オコジョ*	○	○		県天		NT	NT	NT	
ウシ	ウシ	ニホンカモシカ		○		特天					

注) *種の名称は「安曇野市版レッドデータブック 2014」の名称を用いた。

表 2.3.5 (2) 調査範囲を含む地域における注目すべき動物（鳥類）

目名	科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}					
			A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥
コウノトリ	サギ	ヨシゴイ	○					EN	EN	CR+EN	
		ミゾゴイ	○					VU	EN	VU	
		ササゴイ	○	○					VU	VU	
		チュウサギ	○					VU	NT	NT	
		コサギ		○					NT		
タカ	タカ	ハチクマ	○					VU	VU	NT	
		オオタカ	○				国内		VU	NT	
		ハイタカ	○					NT	VU	NT	
		クマタカ	○				国内	EN	EN	CR+EN	指定
		イヌワシ	○			国天	国内	VU	CR	CR+EN	特別
	ハヤブサ	ハヤブサ	○				国内	VU	EN	VU	
キジ	ライチョウ	ライチョウ	○	○		特天	国内	VU	EN	CR+EN	指定
	キジ	ウズラ	○					VU	CR	CR+EN	
ツル	クイナ	クイナ	○						DD	DD	
		ヒクイナ	○	○				NT	CR	CR+EN	
チドリ	タマシギ	タマシギ	○					VU	CR	DD	
	チドリ	コチドリ	○					NT		NT	
		イカルチドリ	○	○						NT	NT
	ケリ	ケリ	○					DD	VU	DD	
	シギ	ヤマシギ	○						DD	DD	
	カモメ	コアジサシ	○	○				NT	CR	CR+EN	
フクロウ	フクロウ	トラフズク	○						EN	DD	
		コミズク	○						EN	DD	
		コノハズク	○					NT	VU	DD	
		オオコノハズク	○						DD	DD	
		アオバズク	○					NT	EN	DD	
ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	○					NT	VU	VU	
ブッポウソウ	カワセミ	ヤマセミ	○	○					VU	VU	
キツツキ	キツツキ	オオアカゲラ		○					NT		
スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ	○	○				VU	N	NT	
	モズ	アカモズ	○					EN	EN	CR+EN	
	ツグミ	ノビタキ		○					NT		
	セッカ	セッカ	○	○					CR	CR+EN	
	カササギヒタキ	サンコウチョウ	○	○					VU	NT	
	ホオジロ	ホオアカ	ホオアカ	○	○					NT	NT
ノジコ		ノジコ	○					NT	NT	NT	

表 2.3.5 (3) 調査範囲を含む地域における注目すべき動物（爬虫類）

目名	科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}					
			A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥
へび	へび	シロマダラ	○						DD	DD	
		ヒバカリ	○	○					DD	DD	

表 2.3.5 (4) 調査範囲を含む地域における注目すべき動物（両生類）

目名	科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}					
			A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥
サンショウウオ	サンショウウオ	クロサンショウウオ	○					NT	NT	NT	
		ヒダサンショウウオ	○					NT	NT	NT	
	イモリ	アカハライモリ	○	○				NT	NT	NT	
カエル	アカガエル	トノサマガエル	○					NT	NT	NT	
		トウキョウダルマガエル	○	○				NT	VU	NT	
		ツチガエル	○	○					VU	VU	

表 2.3.5 (5) 調査範囲を含む地域における注目すべき動物（魚類）

目名	科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}					
			A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥
ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	スナヤツメ	○	○				VU	VU	NT	
サケ	サケ	ニッコウイワナ	○	○				DD	NT	NT	
		ヤマメ	○	○				NT	NT	NT	
コイ	ドジョウ	ドジョウ	○	○				DD		DD	
		ホトケドジョウ	○					EN	VU	VU	
ナマズ	アカザ	アカザ	○					VU	NT	VU	
メダカ	メダカ	ミナミメダカ	○					VU	EN	CR+EN	
カサゴ	カジカ	カジカ	○	○				NT	NT	NT	

表 2.3.5 (6-1) 調査範囲を含む地域における注目すべき動物（昆虫類）

目名	科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}							
			A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥		
カゲロウ	ガガンボカゲロウ	ガガンボカゲロウ	○						DD	DD			
	ヒラタカゲロウ	オビカゲロウ	○						NT	NT			
トンボ	イトトンボ	キイトンボ	○	○							VU		
		オゼイトンボ	○						NT		VU		
		モートンイトンボ	○					NT	N		NT		
	カワトンボ	ミヤマカワトンボ	○								NT		
		アオハダトンボ	○					NT	NT		NT		
	ムカシトンボ	ムカシトンボ	○	○							NT		
	ヤンマ	カトリヤンマ	○	○								VU	
		サラサヤンマ	○							NT		NT	
		ミルンヤンマ	○									NT	
	サナエトンボ	アオサナエ	○							VU		VU	
		オナガサナエ	○									DD	
		ウチワヤンマ	○									NT	
	ムカシヤンマ	ムカシヤンマ	○	○								VU	
	エゾトンボ	トラフトンボ	○							NT		CR+EN	
		ホソミモリトンボ		○						NT			
ハネヒロエゾトンボ		○						VU	EN		CR+EN		
トンボ	ハッチョウトンボ	○	○								CR+EN		
カマキリ	カマキリ	ウスバカマキリ	○					DD			NT		
カワゲラ	トワダカワゲラ	ミネトワダカワゲラ	○									NT	
	ヒロムネカワゲラ	ノギカワゲラ	○	○								NT	
		ミヤマノギカワゲラ	○							NT		NT	
	アミメカワゲラ	ヒメアミメカワゲラ	○									DD	
バッタ	カマドウマ	ヒラタクチキウマ	○									DD	
	マツムシ	カヤコオロギ	○									DD	
		スズムシ	○	○									NT
	コオロギ	クマコオロギ	○										NT
		エゾエンマコオロギ	○										VU
	バッタ	タカネヒナバッタ	○	○									NT
		クモマヒナバッタ	○										NT
		カワラバッタ	○										NT
		クルマバッタ	○										NT
		イナゴモドキ	○										VU
		ツマグロバッタ	○										VU
		イボバッタ	○										NT
		ハネナガイナゴ	○										NT
メスアカフキバッタ		○										NT	
セグロイナゴ		○							VU			CR+EN	
ガロアムシ	ガロアムシ	オオガロアムシ	○						NT		DD		
ナナフシ	ナナフシ	シラキトビナナフシ	○						NT		NT		

表 2.3.5 (6-2) 調査範囲を含む地域における注目すべき動物（昆虫類）

目名	科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}					
			A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥
カメムシ	テングスケバ	クロテングスケバ	○						NT	NT	
	トゲアワフキムシ	タケウチトゲアワフキ	○							NT	
	アブラムシ	オニグルミクチナガオオアブラムシ	○						DD	VU	
	サシガメ	ハリサシガメ	○					NT	VU	CR+EN	
		ゴミアシナガサシガメ	○					VU	VU	CR+EN	
	ツノカメムシ	フトハサミツノカメムシ	○						NT	NT	
		キオビツノカメムシ	○						CR+EN	CR+EN	
	ツチカメムシ	シロヘリツチカメムシ	○					NT		NT	
	カメムシ	ナカボシカメムシ	○						NT	NT	
		ヒメカメムシ	○						NT	NT	
	クスギカメムシ	ヨツモンカメムシ	○						NT	NT	
	ミズカメムシ	ミズカメムシ	○						NT	NT	
	コオイムシ	コオイムシ	○					NT		NT	
		オオコオイムシ	○						NT	NT	
タイコウチ	タイコウチ	○								NT	
	ヒメミズカマキリ	○		○						NT	
アミメカゲロウ	クサカゲロウ	○						VU	NT		
ヘビトンボ	ヘビトンボ	タイリククロスジヘビトンボ	○							NT	
		ヤマトクロスジヘビトンボ	○							NT	
	センブリ	フタオセンブリ	○						DD	DD	
ラクダムシ	ラクダムシ	○								NT	
	キスジラクダムシ	○								NT	
シリアゲムシ	シリアゲムシ	オオハサミシリアゲ	○							NT	
		スカシシリアゲモドキ(短翅型)	○						VU	NT	
トビケラ	ナガレトビケラ	オオナガレトビケラ	○					NT		NT	
	キタガミトビケラ	キタガミトビケラ	○							DD	
チョウ	マダラガ	ベニモンマダラ	○							NT	
	セセリチョウ	ホシチャバネセセリ	○					EN		CR+EN	
		タカネキマダラセセリ	○	○		県天				VU	指定
		アカセセリ	○					EN		VU	
		ギンイチモンジセセリ	○					NT		CR+EN	
		ミヤマチャバネセセリ	○						EN	CR+EN	
		キマダラセセリ	○							VU	
		スジグロチャバネセセリ	○						NT	NT	
ヘリグロチャバネセセリ	○						NT	VU			

表 2.3.5 (6-3) 調査範囲を含む地域における注目すべき動物（昆虫類）

目名	科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}					
			A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥
チョウ	シジミチョウ	ウスイロオナガシジミ	○							NT	
		ウラジロミドリシジミ	○							VU	
		クロミドリシジミ	○							NT	
		ウラナミアカシジミ	○							NT	
		ミヤマシジミ	○					EN	VU	NT	
		アサマシジミ	○							CR+EN	
		オオゴマシジミ	○						NT	VU	
		オオルリシジミ	○							CR+EN	指定
		ムモンアカシジミ	○							NT	
		クロツバメシジミ	○							NT	
タテハチョウ	コヒオドシ	コヒオドシ	○	○		県天				NT	
		ウラギンスジヒョウモン	○					VU	NT	NT	
		ヒョウモンチョウ	○						NT	VU	
		オオイチモンジ	○			県天		VU		VU	指定
		コヒョウモンモドキ	○					EN	VU	CR+EN	
		フタスジチョウ	○							VU	
アゲハチョウ	ジャコウアゲハ	ジャコウアゲハ	○	○						NT	
		ヒメギフチョウ	○	○					NT	NT	
シロチョウ	クモマツマキチョウ	クモマツマキチョウ	○	○		県天				VU	指定
		ミヤマモンキチョウ	○	○		県天				NT	指定
		ツマグロキチョウ	○					EN	EN	CR+EN	
		ヤマキチョウ	○					EN	EN	CR+EN	
		ヒメシロチョウ	○					EN	VU	CR+EN	
ジャノメチョウ	ヒメヒカゲ	ヒメヒカゲ	○							CR+EN	
		クモマベニヒカゲ	○	○		県天				NT	
		ベニヒカゲ	○	○		県天				NT	
		キマダラモドキ	○					NT		VU	
		ツマジロウラジャノメ	○	○						VU	
		クロヒカゲモドキ	○					EN	EN	CR+EN	
		オオヒカゲ	○	○					NT	VU	
		タカネヒカゲ	○	○		県天				NT	
シャクガ	フタオレウスグロエダシャク	フタオレウスグロエダシャク	○							DD	
		フタスジギンエダシャク	○						VU	VU	
		フチグロトゲエダシャク	○							NT	
カレハガ	ヒロバカレハ	○					VU	NT	CR+EN		
スズメガ	メンガタスズメ	メンガタスズメ	○						DD	DD	
		ヒメスズメ	○					NT	NT	VU	
ヒトリガ	ヒメキシタヒトリ	ヒメキシタヒトリ	○							NT	
		ゴマベニシタヒトリ	○					NT	NT	CR+EN	
ドクガ	ウスジロドクガ	○					NT	NT	CR+EN		
ヤガ	ハイマダラクチバ	ハイマダラクチバ	○						CR+EN	CR+EN	
		ヘリグロヒメトウ	○					EN	CR+EN	CR+EN	
		マダラムラサキトウ	○							CR+EN	
		ウスズミケンモン	○					NT	N	DD	

表 2.3.5 (6-4) 調査範囲を含む地域における注目すべき動物（昆虫類）

目名	科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}								
			A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥			
ハエ	ガガンボ	ニッポンクモガタガガンボ	○								NT			
		ミカドガガンボ	○									NT		
	アマカ	ミヤマコマドアマカ	○									NT		
	アマカモドキ	ニホンアマカモドキ	○						VU	VU	NT			
	ニセヒメガガンボ	エサキニセヒメガガンボ	○						DD		NT			
	クサアブ	ネグロクサアブ	○						DD		VU			
	アシナガバエ	タカネキアシナガレアシ ナガバエ	○						NT		DD			
	ハナアブ	ツ/ヒゲハナアブ	○									NT		
		オオコシボソハナアブ	○									NT		
		タカネベッコウハナアブ	○									NT		
クロバエ	クモトラフバエ	○									NT			
コウチュウ	ホソクビゴミムシ	オオホソクビゴミムシ	○									NT		
	オサムシ	シンシュウマルガゴミムシ	○										VU	
		クロカタビロオサムシ	○								NT	NT		
		エゾカタビロオサムシ	○										NT	
		ツヤキベリアオゴミムシ	○							VU	DD	CR+EN		
		オサムシモドキ	○								NT	NT		
		チビアオゴミムシ	○							EN	CR+EN	VU		
		セアカオサムシ	○	○						NT	NT	VU		
		チョウセンマルクビゴミムシ	○										VU	
		キバリマルクビゴミムシ	○							EN		VU		
		アカガネオサムシ	○							VU		VU		
		オオシンシュウナガゴミムシ	○										NT	
		ニセシンシュウナガゴミムシ	○									NT	NT	
		ホソツヤゴモクムシ	○									NT	NT	
	ハンミョウ	ミヤマハンミョウ	○										NT	
		エリザハンミョウ	○										NT	
		コハンミョウ	○								NT	NT		
	ゲンゴロウ	クロゲンゴロウ	○							NT		CR+EN		
		ゲンゴロウ	○							VU		NT		
		シマゲンゴロウ	○							NT		CR+EN		
		ケンゲンゴロウ	○							NT	NT	NT		
		キバリマメゲンゴロウ	○							NT	N	NT		
		クロマメゲンゴロウ	○										NT	
	ミズスマシ	オオミズスマシ	○							NT	NT	NT		
		コミズスマシ	○							EN	VU	NT		
		ヒメミズスマシ	○							EN	VU	VU		
		ミズスマシ	○							VU	VU	VU		
コガシラミズムシ	クビボソコガシラミズムシ	○							DD	NT	NT			
	コガシラミズムシ	○			○							NT		

表 2.3.5 (6-5) 調査範囲を含む地域における注目すべき動物（昆虫類）

目名	科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}							
			A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥		
コウチュウ	カワラゴミムシ	カワラゴミムシ	○								NT		
	ガムシ	ガムシ	○						NT		NT		
		シジミガムシ	○						EN	DD	VU		
	エンマムシ	エンマムシ	○								NT		
	エンマムシモドキ	エンマムシモドキ	○								NT		
	シデムシ	ホンドヒロオビモンシデムシ	○									NT	
		ヤマトモンシデムシ	○						NT			VU	
		ツノグロモンシデムシ	○									NT	
		ビロウドヒラタシデムシ	○							NT		NT	
		オニヒラタシデムシ	○							NT		NT	
		ヒメヒラタシデムシ	○							NT		NT	
	ハネカクシ	コクシヒゲハネカクシ	○									NT	
	ムネアカセンチコガネ	ムネアカセンチコガネ	○									NT	
	クワガタムシ	オオクワガタ	○							VU		CR+EN	
		ヒメオオクワガタ	○									NT	
		トウカイコルリクワガタ	○								NT	NT	
	コガネムシ	アオアシナガハナムグリ	○									NT	
		ヒゲブトハナムグリ	○									NT	
		アカマダラハナムグリ	○							NT		NT	
		オオクロツヤマガソコガネ	○									VU	
		クロモンマグソコガネ	○							NT	CR+EN	CR+EN	
		ヒメカンショコガネ	○								NT	VU	
		ミヤマダイコクコガネ	○									VU	
		オオヒラタハナムグリ	○									NT	
		ウエダエンマコガネ	○									VU	
		マルエンマコガネ	○								VU	VU	
		オオチャイロハナムグリ	○							NT	VU	VU	
		シラホシハナムグリ	○								VU	VU	
		トラハナムグリ	○									VU	
		コブスジコガネ	コブナシコブスジコガネ	○								NT	VU
	コメツキムシ	ミヤマヒサゴコメツキ	○								NT	NT	
		キンムネヒメカネコメツキ	○									NT	
		フタキボシカネコメツキ	○									NT	
		オオクシヒゲコメツキ	○									NT	
	ジョウカイボン	マサタカシリプトジョウカイ	○									NT	
	ホタル	ムネクリイロボタル	○									NT	
		ゲンジボタル	○	○							NT	VU	
		ヘイケボタル	○	○							NT	NT	
		ヒメボタル	○									NT	

表 2.3.5 (6-6) 調査範囲を含む地域における注目すべき動物（昆虫類）

目名	科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}						
			A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥	
コウチュウ	ジョウカイモドキ	ナガサキアオジョウカイモドキ	○						NT	NT		
	テントウムシ	ココノホシテントウ	○						NT	NT		
		ダイモンテントウ	○						NT	VU		
		ヤマトアザミテントウ	○								NT	
		ジュウサンホシテントウ	○						NT	NT		
		ジュウロクホシテントウ	○						NT	NT		
	ヒラタムシ	ルリヒラタムシ	○								NT	
	オオキノコムシ	オオキノコムシ	○								NT	
	オオキスイムシ	ミドリオオキスイ	○								NT	
	ツチハンミョウ	マメハンミョウ	○									VU
		マルクビツチハンミョウ	○							NT		VU
		オオツチハンミョウ	○							NT		VU
	ハナノミ	ヤクハナノミ	○									VU
	アカハネムシ	ナカブサツチピロウドムシ	○									NT
	オオハナノミ	クロオオハナノミ	○									VU
	カミキリムシ	ムモンベニカミキリ	○							VU		NT
		ケブカマルクビカミキリ	○									NT
		トホシハナカミキリ	○							NT		NT
		アカアシオオアカカミキリ	○							NT		NT
		オトメクビアハナカミキリ	○									VU
		シララカハナカミキリ	○									CR+EN
		オニホソコバネカミキリ	○							NT		NT
		ベニバハナカミキリ	○									NT
		コトラカミキリ	○							NT	NT	NT
		チャイロヒメコブハナカミキリ	○									VU
		シナノエゾハイイロハナカミキリ	○							CR+EN		VU
		アラメハナカミキリ	○									NT
アオカミキリ		○									NT	
ヨツボシカミキリ		○							EN		VU	
トラフカミキリ		○							NT		NT	
スマイロハナカミキリ		○									CR+EN	
ハムシ		スジグロオオハムシ	○						DD		VU	
ハチ	コマユバチ	ウマノオバチ	○						NT	NT	VU	
	セイボウ	オオセイボウ本土亜種	○						DD		NT	
	アリ	エゾアカヤマアリ		○					VU	NT		
		トゲアリ	○						VU	NT	VU	

表 2.3.5 (6-7) 調査範囲を含む地域における注目すべき動物（昆虫類）

目名	科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}					
			A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥
ハチ	スズメバチ	ヤドリホオナガスズメバチ	○					DD		VU	
		キオビホオナガスズメバチ チ本州亜種	○					DD		NT	
		シロオビホオナガスズメバチ	○							NT	
		ヤマトアシナガバチ	○					DD		VU	
		モンスズメバチ	○					DD		VU	
		チャイロスズメバチ	○							NT	
		クロスズメバチ	○	○						NT	
		キオビクロスズメバチ	○							DD	
	ミツバチ	ナガマルハナバチ	○					DD		NT	
		ホンシュウハイロマルハナバチ	○							NT	
		クロマルハナバチ	○					NT	NT	NT	
	ハキリバチ	トモンハナバチ	○							NT	

表 2.3.5 (7) 調査範囲を含む地域における注目すべき動物（その他の無脊椎動物）

目名	科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}						
			A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥	
エビ	イワガニ	モクズガニ	○								CR+EN	
ニナ	ゴマガイ	ヒダゴマガイ	○						VU	NT		
	タニシ	マルタニシ	○					VU	NT	VU		
オオカミガイ	ケシガイ	ケシガイ	○					NT	N	NT		
モノアラガイ	モノアラガイ	モノアラガイ	○					NT	NT	NT		
	ヒラマキガイ	ヒラマキガイモドキ	○					NT	NT	NT		
		ヒラマキミズマイマイ	○					DD	N	DD		
マイマイ	ベッコウマイマイ	スカシベッコウ	○					NT	N	NT		
	ベッコウマイマイ	ヒゼンキビ	○					NT	NT	NT		
		ヒメハリマキビ	○					NT	N	NT		
		オオウエキビ	○					DD	N	NT		
	ニッポンマイマイ	カワナピロウドマイマイ	○					NT	VU	NT		
		コシタカコベソマイマイ	○					NT	NT	NT		
	オナジマイマイ	クロイワマイマイ	○							NT		

注 1) 文献調査の出典は以下のとおりである。

なお、河川環境データベースでは、2004 年の河川水辺の国勢調査の調査結果のうち、「高瀬川合流地点」での調査結果を抽出した。

A：「安曇野市版レッドデータブック 2014」（平成 26 年 7 月 安曇野市）

B：「穂高町誌 自然編」（平成 3 年 1 月 穂高町誌編纂委員会）

C：「河川環境データベース（河川水辺の国勢調査）」（国土交通省ホームページ）に示されている対象種

注 2) 注目すべき種は、既存文献を基に以下の選定基準から抽出した。選定基準は以下のとおりである。

- ①：「文化財保護法（1950 年）」に基づく天然記念物及び特別天然記念物に指定されている種または、「文化財保護条例（1975 年）」に基づく県天然記念物に指定されている種
- ②：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（1992 年）」に基づく国内希少動植物種及び国際希少野生動植物種及び緊急指定種に指定されている種
- ③：「レッドデータブック 2014」（平成 27 年 3 月 環境省）に記載されている種
- ④：「長野県版レッドリスト（動物編）2014」（平成 27 年 3 月 長野県）に記載されている種
- ⑤：「安曇野市版レッドデータブック 2014」（平成 26 年 7 月 安曇野市）に記載されている種
- ⑥：「長野県希少野生動植物保護条例（平成 15 年）」に基づく指定希少野生動植物及び特別指定希少野生動植物（脊椎動物）に指定されている種

注 3) ①～⑤の選定基準の記号は以下のとおりである。

- ①：特天：国指定特別天然記念物
国天：国指定天然記念物
県天：県指定天然記念物
- ②：国内：国内希少野生動植物種
国際：国際希少野生動植物種
- ③、④、⑤：EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR+EN：絶滅危惧 I 類、CR：絶滅危惧 I A 類
EN：絶滅危惧 I B 類、VU：絶滅危惧 II 類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足
LP：絶滅のおそれのある地域個体群、留意：留意種
なお、EX 及び EW はリストから省いた
- ⑥：特別：特別指定希少野生動植物、指定：指定希少野生動植物

(2) 植物

1) 植生の概要

「長野県植物誌」(平成9年長野県植物誌編纂委員会)によると、長野県内の大部分は冷温帯であり、夏緑(落葉)広葉樹林からなるブナクラスの植生が広がっている。しかし、多くの人々が生活を送る暖温帯から冷温帯にかけては、古くからの人々が暮らす生活圏と重なってきたために、自然植生の大半は消滅して代償植生と化している。

安曇野市は、北アルプスの高山から西沢沿いの低地まで標高差が大きく、高山帯、亜高山帯、山地帯、山麓部・平野部、河川・水辺の多様な環境が存在している。高山にはハイマツを中心とした群落がみられ、お花畑と呼ばれる植物群落もみられる。亜高山帯にはシラビソ、オオシラビソ等を中心とした常緑針葉樹林が広がり、森林限界付近には丈の低い落葉広葉樹林もみられる。山地帯にはカラマツ、アカマツ、スギ、ヒノキの植林地や、クリ、コナラ、ミズナラ等による二次林が広がっている。山麓部・平野部の多くは人間の生活域と重なっており、水田や畑地、果樹園等が多く、西洋タンポポやオオイヌノフグリ、イネ科等の草本がみられる。これらの多くは外来生物である。山地帯の河川ではサワグルミ、カツラ等を中心とした湿性林がみられ、山麓部・平野部の河川ではコゴメヤナギ、タチヤナギ等やハリエンジュがみられるほか、砂礫地にはカワラヨモギやカワラハハコ等の草本が生育している。湧水地や池沼にはバイカモ、カワヂシャ、エビモ、ミクリ、ガマ等の水生植物が生育している。

現存植生図を図 2.3.12 に示す。

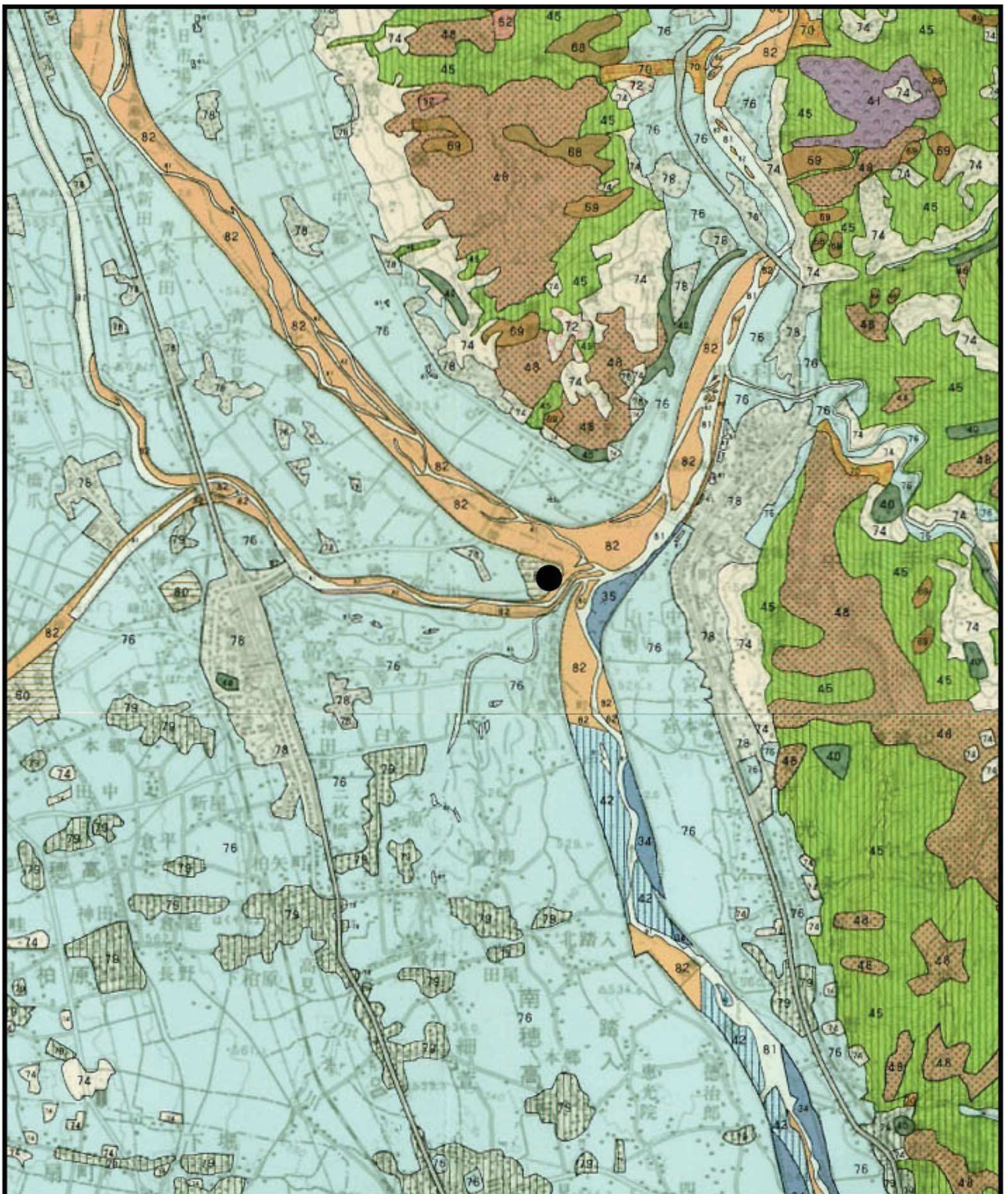
2) 注目すべき植物及び植物群落

対象事業実施区域を含む地域で確認された注目すべき植物を表 2.3.6 に示す。

注目すべき植物として 156 種が挙げられる。

3) 植物からみた対象事業実施区域の位置付け

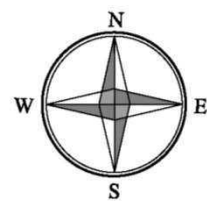
対象事業実施区域は、現状でグラウンド等として利用されている、既に改変された場所であるため、対象事業実施区域内に生育する植物は極めて限られる。しかし、高瀬川、穂高川、犀川の三川合流地域に位置し、周辺の河川や湧水に豊かな自然環境を残しており、河川や水辺の植物の生育場所に接している。



凡 例

● 対象事業実施区域

図2.3.12(1) 現存植生図



Scale 1/50,000
0 1,000 2,000 3,000m

出典：「第3回自然環境保全基礎調査（植生調査）現存植生図（信濃池田）」及び「同（松本）」（昭和60年、環境庁）



図 2.3.12(2) 現存植生図

表 2.3.6 (1) 対象事業実施区域及び周囲における注目すべき植物

科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}						備考
		A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥	
ヒカゲノカズラ	ミズスギ	○						CR	CR+EN		
トクサ	イヌスギナ	○						NT	VU		
ハナヤスリ	エゾフユノハナワラビ	○							NT		
ヒメウラボシ	オオクボシダ	○						NT	CR+EN		
アカウキクサ	オオアカウキクサ	○					EN	EN	VU		
イヌガヤ	イヌガヤ	○							NT		
ヤナギ	ケショウヤナギ	○						NT	NT		
	シロヤナギ	○							CR+EN		
	エゾヤナギ	○						EN	CR+EN		
イラクサ	ヤマトキホコリ	○							CR+EN		
	コバノイラクサ	○							NT		
アカザ	カワラアカザ	○							NT		
ヤマグルマ	ヤマグルマ	○							VU		
キンボウゲ	フクジュソウ	○						NT	CR+EN		
	キクザキイチゲ	○							VU		
	アズマイチゲ	○							NT		
	センニンソウ	○							VU		
	バイカモ	○		○					NT		
	セツブンソウ	○					NT	VU	CR+EN		
メギ	メギ	○							NT		
	コウモリカズラ	○							CR+EN		
ウマノスズクサ	ウマノスズクサ	○					VU	VU			
オトギリソウ	コケオトギリ	○							VU		
	タコアシオトギリ	○							NT		
	ミズオトギリ	○							NT		
ケシ	ヤマキケマン	○							NT		
アブラナ	エゾハタザオ	○							VU		
	マルバコンロンソウ	○							VU		
	キバナハタザオ	○							NT		
ベンケイソウ	ツメレンゲ	○	○				NT	NT	VU		
	マルバマンネングサ	○						VU	VU		
ユキノシタ	ハナネコノメ	○							VU		
	ボタンネコノメソウ	○						NT	CR+EN		
	チシマネコノメ	○							NT		
	ヤブサンザシ	○							VU		
	ザリコミ	○							VU		
	スグリ	○							CR+EN		
バラ	ヒメキンミズヒキ	○							VU		
マメ	クサネム	○		○					VU		
	ホドイモ	○							VU		
	モメンヅル	○						NT	VU		
	サイカチ	○						NT	NT		
	イヌハギ	○					VU	N	NT		
	マキエハギ	○							CR+EN		
	ミヤコグサ	○		○					NT		
	ヤブツルアズキ	○							VU		
トウダイグサ	ノウルシ	○					NT	EN	CR+EN		
	ニシキソウ	○						VU	VU		
ドクウツギ	ドクウツギ	○						VU			
クロウメモドキ	クマヤナギ	○							NT		
	ケンボナシ	○							NT		
シナノキ	カラスノゴマ	○						NT	NT		

表 2.3.6 (2) 対象事業実施区域及び周囲における注目すべき植物

科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}						備考
		A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥	
スミレ	サクラスミレ	○							VU		
	コスミレ	○							VU		
	マルバスマレ	○							VU		
ウリ	ゴキヅル	○		○					VU		
	アマチャヅル	○							CR+EN		
ミソハギ	ヒメミソハギ	○						DD	CR+EN		
ヒシ	ヒシ	○		○					NT		
アリノトウグサ	ホザキノフサモ	○		○					NT		
ウコギ	トチバニンジン	○							VU		
セリ	セントウソウ	○							CR+EN		
	ハナウド	○							NT		
	ムカゴニンジン	○							VU		
イチヤクソウ	ハダカシヤクジョウソウ	○							NT		
リンドウ	アケボノソウ	○							VU		
	センブリ	○						NT	VU		
ガガイモ	スズサイコ	○					NT	NT	NT		
アカネ	オオアカネ	○							CR+EN		
ムラサキ	オニルリソウ	○							NT		
クマツヅラ	クマツヅラ	○							CR+EN		
アワゴケ	ミズハコベ		○	○							
シソ	ムシヤリンドウ	○						VU	VU	CR+EN	
	メハジキ	○							NT	VU	
	キセワタ	○						VU	N	VU	
	デンニンソウ	○								VU	
	シロネ	○		○						VU	
	コシロネ	○								NT	
ゴマノハグサ	ウリクサ	○							VU	CR+EN	
	アゼトウガラシ	○							NT	VU	
	ヒキヨモギ	○							NT	VU	
	ヒヨクソウ	○							NT	NT	
	イヌノフグリ	○						VU	VU	CR+EN	
	カラヂシャ	○						NT	NT	CR+EN	
ハマウツボ	オカウツボ	○						VU	CR+EN		
タヌキモ	ミミカキグサ	○						VU	CR+EN		
オミナエシ	オミナエシ	○							VU		
マツムシソウ	マツムシソウ	○							VU		
キキョウ	ミヅカクシ	○								CR+EN	
	サワギキョウ	○								NT	
	キキョウ	○						VU	NT	VU	
キク	アブラギク	○						NT	NT	NT	別名:キクタニギク
	ムカシヨモギ	○								VU	
	サワヒヨドリ	○								VU	
	ヤナギタンポポ	○								NT	
	カセンソウ	○								CR+EN	
	タカサゴソウ	○						VU	VU	CR+EN	
	カララニガナ	○						NT	VU	VU	
	シラネアザミ	○								VU	
	コウリンカ	○						VU	N	VU	
	タムラソウ	○								VU	
	ウスギタンポポ	○							VU	CR+EN	
オナモミ	○							VU	VU		
オモダカ	ヘラオモダカ	○		○						VU	

表 2.3.6 (3) 対象事業実施区域及び周囲における注目すべき植物

科名	種名	文献調査 ^{注1}			選定基準 ^{注2-3}						備考
		A	B	C	①	②	③	④	⑤	⑥	
オモダカ	アギナシ	○					NT	EN	NT		
	オモダカ	○							NT		
トチカガミ	クロモ	○						CR	VU		
	セキショウモ	○						EN	CR+EN		
ヒルムシロ	コバノヒルムシロ	○					VU	VU	CR+EN		
	ヒルムシロ	○							VU		
	フトヒルムシロ	○							CR+EN		
	ホソバミズヒキモ	○						NT	NT		
	イトモ	○					NT	VU	VU		
ユリ	スズラン	○						NT	DD		別名:カキラン
	カタクリ	○							NT		
	ササユリ	○						NT	CR+EN	指定希少	
	ヒメヤブラン	○							CR+EN		
	コワニグチソウ	○							NT		
	アマナ	○						VU	NT		
アヤメ	ノハナショウブ	○							NT		
	アヤメ	○							NT		
イグサ	イトイ	○							NT		
ツユクサ	イボクサ	○							NT		
ホシクサ	イトイヌノヒゲ	○							CR+EN		
	シロイヌノヒゲ	○							CR+EN		
イネ	カズノコグサ	○							VU		
	オガルカヤ	○							NT		
	ドジョウツナギ	○							NT		
	ヒロハノドジョウツナギ	○							NT		
	アワガエリ	○						CR	NT		
	ヌメリグサ	○						NT	CR+EN		
サトイモ	ショウブ	○							NT		
	ヒロハテンナンショウ	○							NT		
	イナヒロハテンナンショウ	○					CR	CR	CR+EN		
ミクリ	ミクリ	○					NT	VU	NT		
ガマ	コガマ	○							NT		
カヤツリグサ	アゼナルコ	○						EN	CR+EN		
	コジュズスゲ	○							VU		
	ヒメゴウソ	○							DD		
	タカネマスクサ	○							NT		
	オニスゲ	○							CR+EN		
	アブラシバ	○							CR+EN		
	アオガヤツリ	○						NT	CR+EN		
	ヌマガヤツリ	○		○				EN	NT		
	イガガヤツリ	○							CR+EN		
	シカクイ	○							DD		
	イトイヌノハナヒゲ	○							CR+EN		
	コイヌノハナヒゲ	○							CR+EN		
	シズイ	○						VU	VU		
ウキヤガラ	○		○						NT		
ラン	ミズトンボ	○					VU	VU	DD		
	ミズチドリ	○						NT	DD	指定希少	
	マンシュウヤマサギソウ	○						VU	DD		
	トクソウ	○					NT	VU	DD	指定希少	
	マツラン	○						CR	DD		別名:ベニカヤラン
	ネジバナ	○							NT		

注 1) 文献調査の出典は以下のとおりである。

なお、「安曇野市版レッドデータブック 2014」では、掲載されている種のうち、分布が穂高地区及び明科地区であり、生育環境の標高区分が森林及び山麓・平野で、典型的な環境が草原、裸地、湿地、耕作地、市街地、河川、池沼、用水路、湧水池とされているものを抽出した。また、河川環境データベースでは、2004 年の河川水辺の国勢調査の調査結果のうち、「高瀬川合流地点」での調査結果を抽出した。

A：「安曇野市版レッドデータブック 2014」（平成 26 年 7 月 安曇野市）

B：「穂高町誌自然編」（平成 3 年 1 月 穂高町誌編纂委員会）

C：「河川環境データベース（河川水辺の国勢調査）」（国土交通省ホームページ）

注 2) 注目すべき種は、既存文献を基に以下の選定基準から抽出した。選定基準は以下のとおりである。

- ①：「文化財保護法（1950 年）」に基づく天然記念物及び特別天然記念物に指定されている種または、「文化財保護条例（1975 年）」に基づく県天然記念物に指定されている種
- ②：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（1992 年）」に基づく国内希少動植物種及び国際希少野生動植物種及び緊急指定種に指定されている種
- ③：「レッドデータブック 2014」（平成 27 年 3 月 環境省）に記載されている種
- ④：「長野県版レッドリスト（植物編）2014」（平成 27 年 6 月 長野県）に記載されている種
- ⑤：「安曇野市版レッドデータブック 2014」（平成 26 年 7 月 安曇野市）に記載されている種
- ⑥：「長野県希少野生動植物保護条例（平成 15 年）」に基づく指定希少野生動植物及び特別指定希少野生動植物（脊椎動物）に指定されている種

注 3) ①～⑤の選定基準の記号は以下のとおりである。

①：特天：国指定特別天然記念物

国天：国指定天然記念物

県天：県指定天然記念物

②：国内：国内希少野生動植物種

国際：国際希少野生動植物種

③、④、⑤：EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧 I A 類、EN：絶滅危惧 I B 類、

VU：絶滅危惧 II 類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、

LP：絶滅のおそれのある地域個体群

なお、EX 及び EW 絶滅はリストから省いた

⑥：特別：特別指定希少野生植物、指定：指定希少野生植物

(3) 生態系

対象事業実施区域は、高瀬川、穂高川、犀川の三川合流地域に位置しており、河川や湧水の水生植物、その周辺の湿性植物、河原の草本等の植物が生育する場所や河畔林に接している。また、水田やワサビ田も周囲にあり、人里の耕地の植物も多い地域である。

これに伴い動物相も多様であり、河川や湧水地の魚類や底生動物、湿地や池沼の環境の両生類や昆虫類、湿性環境や河原を好む鳥類や水鳥などが生息しているほか、人里や耕地の動物群集も見られる環境となっている。

人の手があまり入っていない水辺の原生的な自然環境がある一方で、外来生物の入りやすい人の手が入った環境も隣接する地域となっている。

「安曇野市版レッドデータブック 2014」（平成 26 年 7 月安曇野市）では、重要な自然環境として「三川合流地周辺」と「御法田周辺」を選定している。

2.3.5 自然環境の総合的な状況

対象事業実施区域のある安曇野市穂高一帯は、内陸性の気候であり、気温の年較差、日較差が大きい特徴がある。穂高気象観測所では、平均風速の平年値は 1.0～1.7m/s であり、風は春に強く秋に弱い傾向がある。最寄りの松本地域気象観測所では、北～北北西及び南～南南東の風が多くなっている。

対象事業実施区域の西側には、地下水の涵養域となる複合扇状地が広がっており、縦横に張り巡らされた用水によって水田耕作が営まれている。対象事業実施区域周辺は高瀬川、穂高川、犀川の三川合流地域に位置するもっとも標高が低い流出域にあるため、各所に湧水起源の清冽な流れがみられ、湿性の環境が広がり、わさび田が多い。

対象事業実施区域は既に改変された場所であるが、周辺の水生植物や湿性植物、河原の草本等の植物が生育する場所や河畔林に接しているほか、水田やワサビ田も周囲にあり、人里の耕地の植物も多い地域である。これに伴い動物相も多様であり、河川や湧水地、湿地、池沼、河原などの水辺の動物のほか、人里や耕地の動物群集も見られる、原生的な自然と人里の自然が隣り合った地域となっている。

2.3.6 景観・文化財の状況

(1) 景観

1) 自然景観資源

対象事業実施区域のある安曇野市には、西部には燕岳、大天井岳、常念岳等の標高3,000m級の北アルプス連邦がそびえ立ち、この山々を源流とする梓川、中房川、高瀬川などが流れ、犀川に合流している。また北アルプスの雪融け水が豊富な湧水となって湧き出ている。

海拔500m～700mの概ね平坦な複合扇状地には水田が広がっており、北アルプス、田園と集落が一体となった景観は「安曇野」の特徴的な景観である。

「第3回自然環境保全基礎調査 長野県自然環境情報図」（平成元年 環境庁）によると、対象事業実施区域及びその周囲に自然景観資源は存在しない。

2) 主要な眺望景観

対象事業実施区域のある安曇野市における主要な視点場からの眺望景観の状況を表2.3.7に、主要な視点場の分布状況を図2.3.13に示す。

わさび農場や自然体験交流センターなど対象事業実施区域の最寄りの視点場のほか、長峰山や光城山などの高台から穂高クリーンセンターの煙突または煙突及び施設の一部を眺望することができる。

また、北アルプスの山麓からは、距離が離れているため見える施設のサイズは小さいが、穂高から三郷までの広い範囲で煙突または煙突及び施設の一部を眺望することができる。

表 2.3.7 安曇野市内の主要な視点場の状況

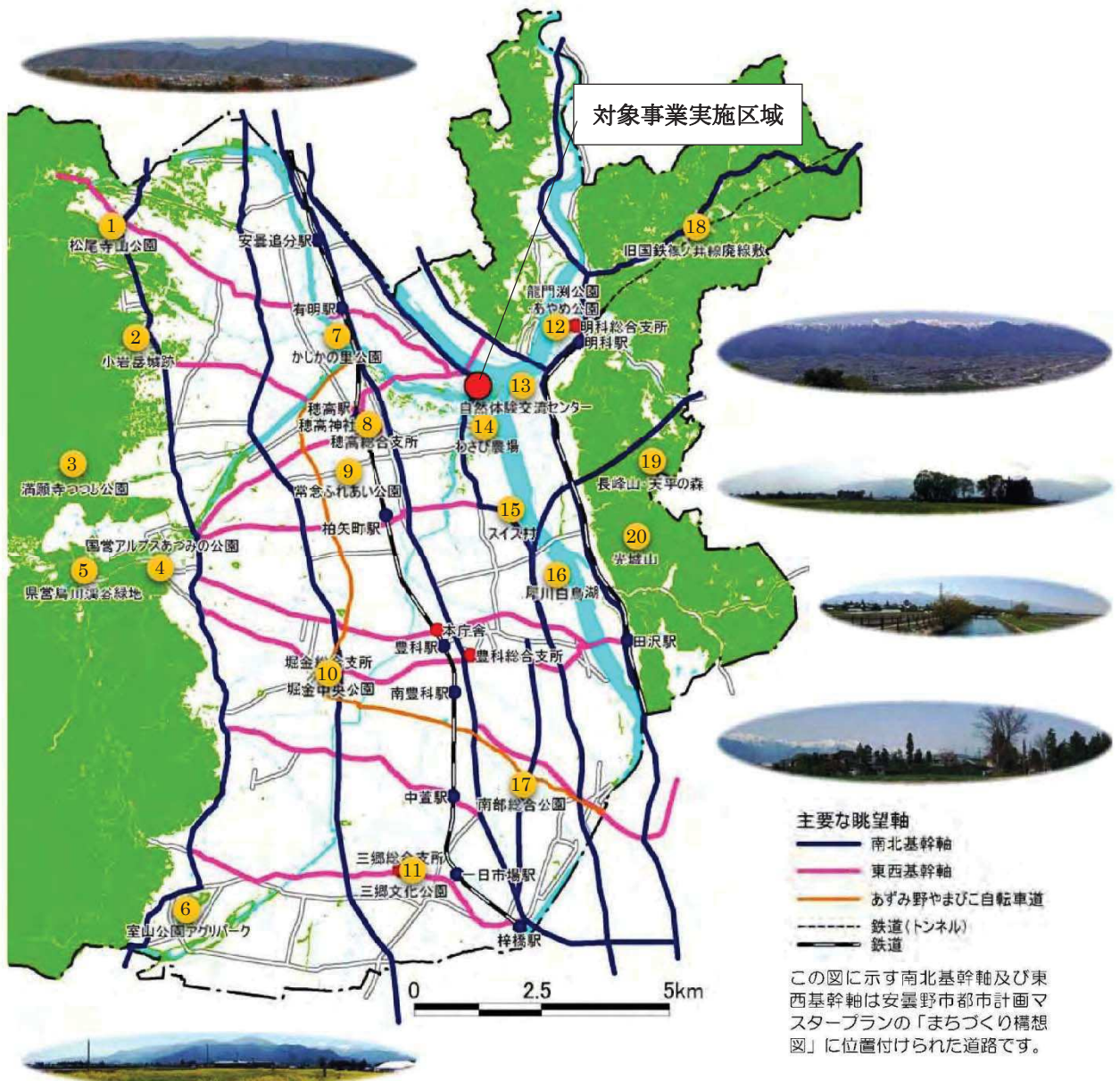
名称		眺望の可否	名称		眺望の可否
1	松尾寺山公園	×	14	わさび農場	○
2	小岩岳場跡	×	15	スイス村	○
3	万願寺つつじ公園	×	16	犀川白鳥湖	○
4	国営アルプスあづみの公園	○	17	南部総合公園	×
5	県営烏川渓谷緑地	×	18	旧国鉄篠ノ井線廃線敷	×
6	室山公園アグリパーク	×	19	長峰山 天平の森	○
7	かじかの里公園	×	20	光城山	○
8	穂高神社	×			
9	常念ふれあい公園	○			
10	堀金中央公園	×			
11	三郷文化公園	×			
12	あやめ公園	○			
13	自然体験交流センター	○			

注1)「○」は対象事業実施区域が眺望できる地点、「×」は眺望できない地点を示す。

注2)眺望の可否については現地で目視による確認を行った。

注3)表中の番号は図2.3.13に対応している。

出典:「安曇野市景観づくりガイドライン」(平成23年 安曇野市)



出典:「安曇野市景観づくりガイドライン」(平成 23 年 安曇野市)

図 2.3.13 主要な眺望点

(2) 文化財

対象事業実施区域及びその周辺における指定等文化財は表 2.3.8 に、その分布状況を図 2.3.14 に示す。また、埋蔵文化財の状況を図 2.3.15 に示す。

「長野県環境影響評価技術指針マニュアル」（平成 19 年 8 月 長野県）に準じて文化財の予備調査の範囲は概ね半径 1km とした。半径 1km の範囲には指定文化財及び埋蔵文化財はない。

表 2.3.8(1) 指定等文化財の状況

番号	文化財名称	区分		
		指定等	種別	内容
4	宝篋印塔	国指定	重要文化財	石造物
4	旧高橋家住宅主屋ほか(建造物4棟)	国登録	登録有形文化財	住宅建築
2	穂高神社の御船祭りの習慣俗	県指定	県無形民俗文化財	民俗芸能
7	木造日光菩薩立像 木造月光菩薩立像	県指定	県宝	彫刻
9	光久寺薬師堂	県指定	県宝	寺院建築
10	長光寺薬師堂及び宮殿	県指定	県宝	寺院建築
6	重柳大日堂の木造大日如来坐像	市指定	市有形文化財	彫刻
17	等々力家の長屋門	市指定	市有形文化財	住宅建築
18	等々力家の古文書	市指定	市有形文化財	書跡・典籍・古文書
19	三宮穂高社御造宮定日記	市指定	市有形文化財	書跡・典籍・古文書
20	穂高神社の鷺足膳	市指定	市有形文化財	美術工芸
23	松澤求策の肖像	市指定	市有形文化財	絵画
24	松澤求策関係書(穂高商会関係)	市指定	市有形文化財	歴史資料
25	松澤求策関係文書	市指定	市有形文化財	歴史資料
26	井口喜源治関係文書	市指定	市有形文化財	歴史資料
28	穂高神社の手洗石と手水舎	市指定	市有形文化財	石造物
29	穂高神社の神橋	市指定	市有形文化財	石造物
58	宗林寺の本堂	市指定	市有形文化財	寺院建築
59	宗林寺の山門	市指定	市有形文化財	寺院建築
60	雲龍寺の本堂	市指定	市有形文化財	寺院建築
61	雲龍寺の山門	市指定	市有形文化財	寺院建築
66	光の五社本堂	市指定	市有形文化財	神社建築
67	潮神明宮本殿	市指定	市有形文化財	神社建築
68	小芹春日社の神楽殿回り舞台	市指定	市有形文化財	神社建築
70	宗林寺の石像宝篋印塔	市指定	市有形文化財	石造物
71	光久寺の石像宝篋印塔	市指定	市有形文化財	石造物
74	給然寺の紙本観経曼陀羅	市指定	市有形文化財	絵画
77	長光寺の木造薬師如来坐像	市指定	市有形文化財	彫刻
78	雲龍寺の木造大日如来坐像	市指定	市有形文化財	彫刻
79	龍門寺の木造聖観音菩薩坐像	市指定	市有形文化財	彫刻
81	潮神明宮の木造狛犬像	市指定	市有形文化財	彫刻

注1) 表中の番号は図 2.3.13 に対応している。

注2) 図 2.3.13 に記載のある文化財のみ抜粋。

出典：「安曇野市文化財マップ」（平成 25 年 安曇野市）

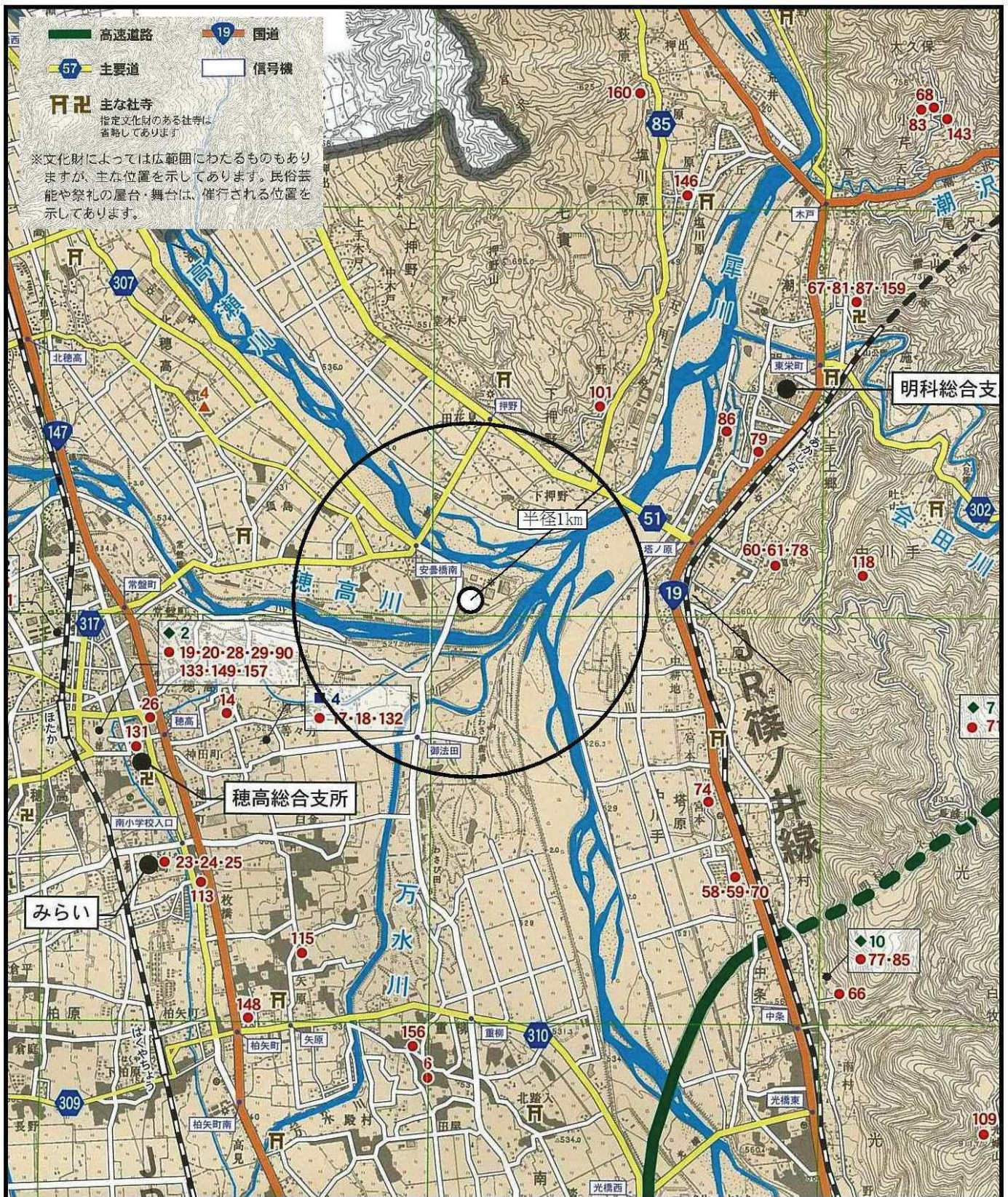
表 2.3.8(2) 指定等文化財の状況

番号	文化財名称	区分		
		指定等	種別	内容
83	小芹薬師堂の木造薬師如来坐像	市指定	市有形文化財	彫刻
85	長光寺の木造臥竜彫刻	市指定	市有形文化財	彫刻
86	大庄屋関氏文書	市指定	市有形文化財	歴史資料
87	潮神明宮の日岐盛直神田寄進状	市指定	市有形文化財	歴史資料
90	穂高神社の絵馬	市指定	市有形民俗文化財	信仰
101	下押野青柳庵の石仏群	市指定	市有形民俗文化財	信仰
109	光城跡	市指定	市史跡	城跡
113	形成義塾跡	市指定	市史跡	学校跡
115	形成義塾創設の地跡	市指定	市史跡	学校跡
118	塔ノ原城跡	市指定	市史跡	城跡
131	穂高神社の大門の櫓	市指定	市天然記念物	植物
132	等々力家のビャクシン	市指定	市天然記念物	植物
133	穂高神社若宮西の櫓	市指定	市天然記念物	植物
143	小芹神社の櫓	市指定	市天然記念物	植物
146	塩川原天狗社の櫓	市指定	市天然記念物	植物
148	矢原社宮地のマユミ	市指定	市天然記念物	植物
149	穂高神社のお奉射神事	市指定	市無形民俗文化財	芸能
156	重柳八幡宮祭り舟	市指定	市無形民俗文化財	芸能
157	穂高神社式年遷座祭	市指定	市無形民俗文化財	信仰
159	潮神明宮の柴舟と人形飾り物	市指定	市無形民俗文化財	信仰
160	荻原神社のお船祭り	市指定	市無形民俗文化財	信仰

注 1) 表中の番号は図 2.3.13 に対応している。

注 2) 図 2.3.13 記載のある文化財のみ抜粋。

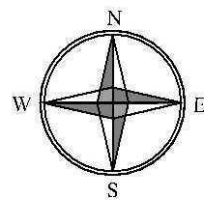
出典：「安曇野市文化財マップ」（平成 25 年 安曇野市）



凡例

- 対象事業実施区域
- 国指定文化財
- ▲ 国登録文化財
- ◆ 県指定文化財
- 市指定文化財

図2.3.14 指定等文化財の分布状況



Scale 1/31,250

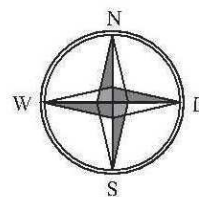


凡 例

- 対象事業実施区域
- ▨ 埋蔵文化財包蔵地
- 遺物出土地点

※旧穂高町と旧明科町とでデータの整理方法が異なっており、旧明科町については遺物出土地点は示されていない。

図2.3.15 埋蔵文化財の状況



Scale 1/25,000
 0 500 1,000 1,500m

2.3.7 触れ合い活動の場の状況

(1) 触れ合い活動の場の資源状況

対象事業実施区域及びその周囲における主な人と自然との触れ合い活動の場の状況を図 2.3.16 に示す。

対象事業実施区域の最寄りの人と触れ合い活動の場としては、南側に大王わさび農場が、東側に自然体験交流センター・せせらぎがある。

(2) 触れ合い活動の場の利用状況

対象事業実施区域のある安曇野市の観光地延べ利用者数の推移を表 2.3.9 に示す。

対象事業実施区域の南側には、大王わさび農場がある。「平成 26 年度観光地利用者統計調査結果」によると、平成 26 年度の「安曇野湧水群」の利用者数は 16,755 人となっている。

なお、「安曇野湧水群」には大王わさび農場及びその周辺の観光施設や民宿などが含まれる。

表 2.3.9 観光地延べ利用者数の推移

(単位：百人)

年度 観光地名	平成 22 年	平成 23 年	平成 24 年	平成 25 年	平成 26 年	備考
とよしな「安曇野の里」	2,589	2,576	2,375	2,296	-	平成 26 年度から「安曇野湧水群」に含める
中房	510	522	482	497	364	
アルプス銀座	588	828	1,067	1,013	945	
ほりがね道の駅・楡の里	-	-	-	-	6,718	平成 26 年から新規
穂高まちなか	-	-	-	-	878	平成 26 年から新規
安曇野湧水群	-	-	-	-	16,755	平成 26 年から新規
安曇野穂高温泉郷	10,124	11,843	11,246	11,541	15,261	
烏川溪谷	-	-	-	-	6,877	平成 26 年から新規
碌山美術館・わさび畑周辺	11,692	17,084	13,799	13,262	-	平成 26 年から「穂高まちなか」に含める
黒澤	2,121	2,074	2,198	1,998	250	
須砂渡	2,023	2,285	1,697	2,433	-	
長峰山	565	579	520	503	118	
龍門淵公園・あやめ公園	1,037	1,271	466	568	-	平成 26 年に取消
国営アルプスあづみの公園	2,977	3,416	2,856	2,534	-	平成 26 年から「烏川溪谷」に含める

出典：「平成 26 年度観光地利用者統計調査結果」(平成 27 年 長野県)



凡 例

- 対象事業実施区域
- レクリエーション地

図2.3.16 主な触れ合い活動の場の状況

Scale 1/50,000

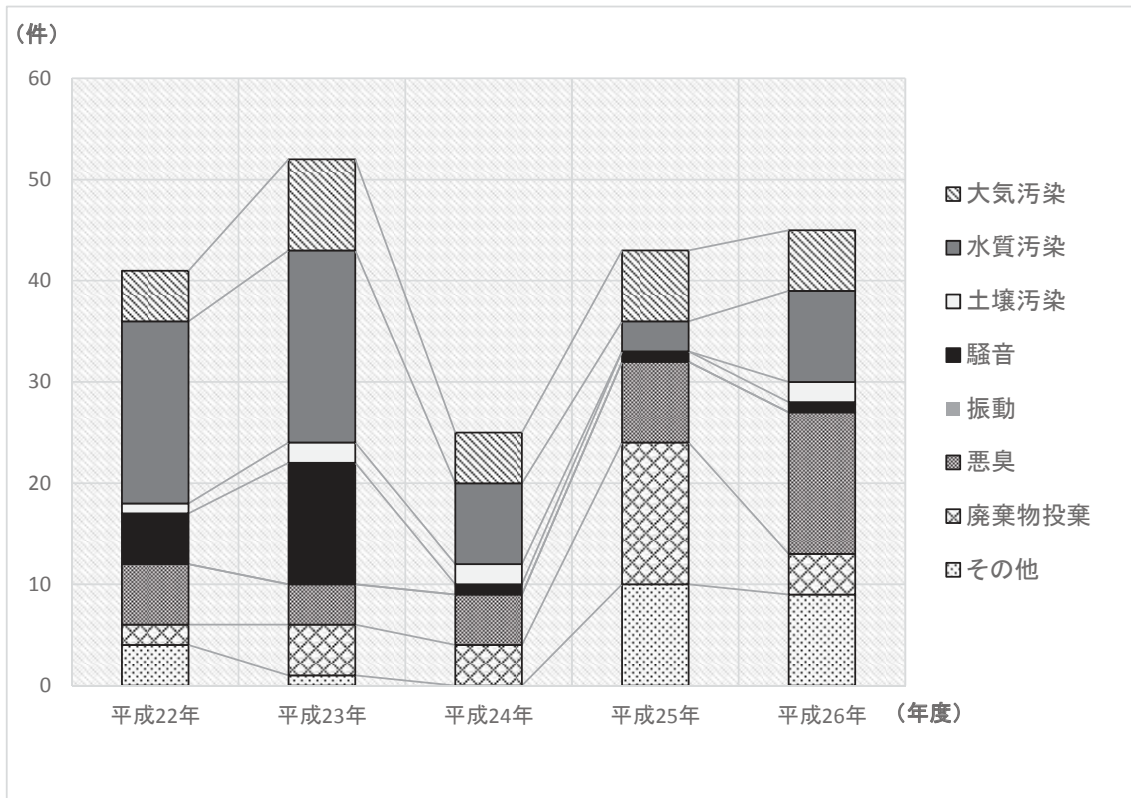
この地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図を基に作成した。
 出典：一般財団法人安曇野市観光協会ホームページ「安曇野の旅」

2.3.8 大気質・水質等の状況

(1) 公害苦情の状況

安曇野市における公害苦情の状況を図 2.3.17 に示す。

平成 26 年度の公害苦情の件数は 45 件である。種別にみると、最も多いのは廃棄物の不法投棄の 14 件である。次いで水質汚染及びその他がそれぞれ 9 件、大気汚染の 6 件の順となっている。



出典:「安曇野市資料」

図 2.3.17 公害苦情件数の推移

(2) 大気質

1) 大気汚染測定局

長野県では大気汚染防止法第 20 条及び第 22 条の規定に基づき、二酸化硫黄等の大気汚染物質の調査を実施している。対象事業実施区域のある安曇野市では固定局による常時監視は行われていない。長野県の大気質の調査結果については、参考までに隣接する松本市及び大町市の調査結果を示す。

大気汚染自動測定局配置状況及び測定項目を表 2.3.10 及び図 2.3.18 に示す。

表 2.3.10 (1) 一般環境大気測定局整備状況一覧表

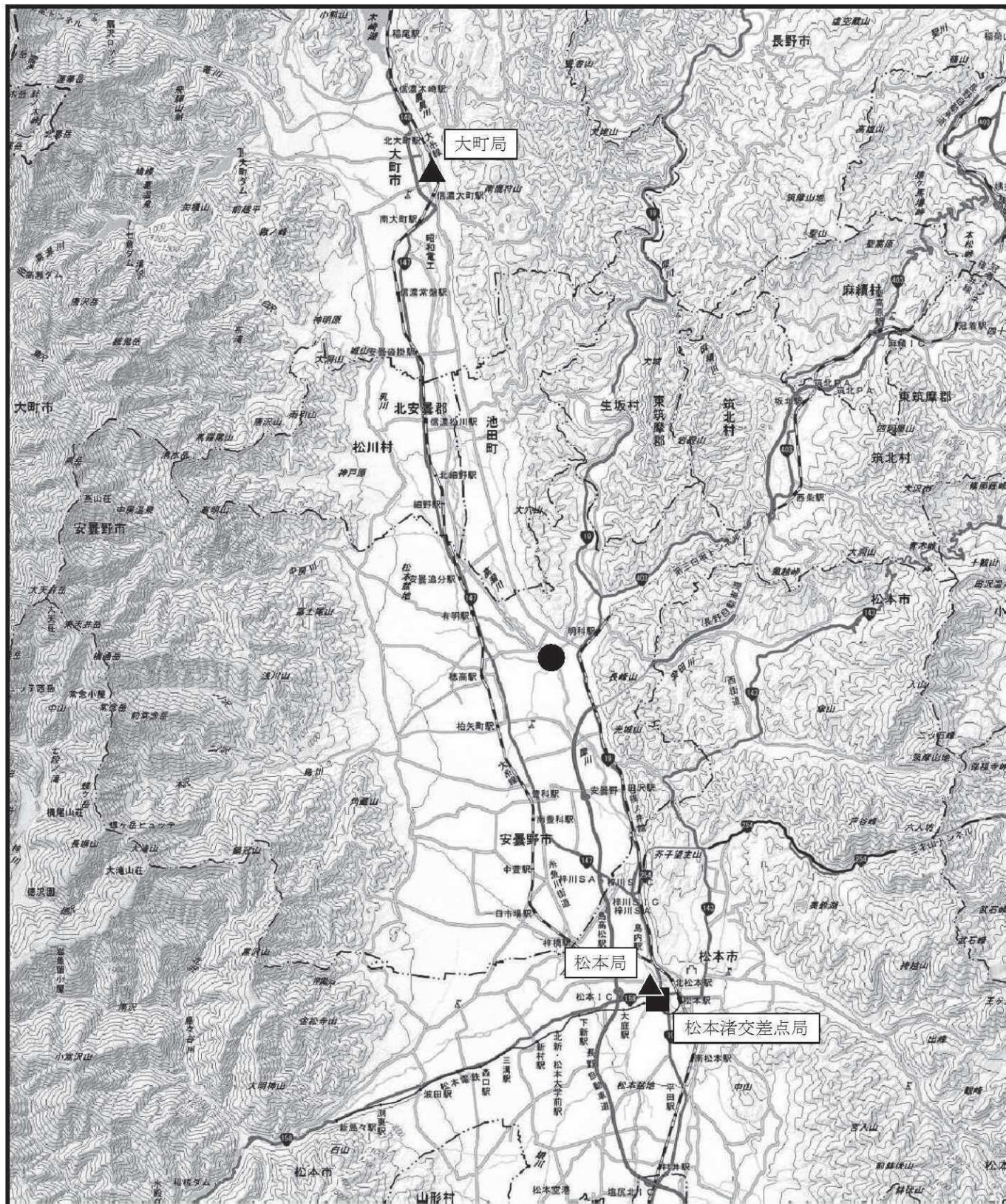
測定局	一般局・自排局別	用途地域	測定項目													
			二酸化硫黄	浮遊粒子状物質	一酸化窒素	二酸化窒素	光化学オキシダント	炭化水素（CH ₄ 及びNMHC）	微小粒子状物質 PM2.5		風向	風速	気温	湿度	日射量	紫外線量
									質量	成分						
松本局	一般	住	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
大町局	一般	住			○	○	○				○	○				

出典：「平成 25 年度大気測定計画」（長野県）

表 2.3.10 (2) 自動車排出ガス測定局整備状況一覧表

測定局	一般局・自排局別	用途地域	測定項目							
			浮遊粒子状物質	一酸化窒素	二酸化窒素	一酸化炭素	微小粒子状物質 PM2.5		風向	風速
							質量	成分		
松本渚交差点局	自排	準工	○	○	○	○	○		○	○

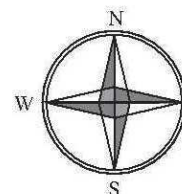
出典：「平成 25 年度大気測定計画」（長野県）



凡 例

- 対象事業実施区域
- ▲ 一般環境大気測定局
- 自動車排出ガス測定局

図2.3.18 一般環境大気及び自動車排出ガス測定局位置図



Scale 1/200,000
0 5 10km

この地図は、国土地理院ホームページ「電子国土Web」を基に作成した。
出典：「平成25年度大気測定計画」（長野県）

2) 二酸化硫黄

隣接する松本市の一般環境大気測定局（松本局）における二酸化硫黄の測定結果を表 2.3.11 に、平成 21 年度～平成 25 年度の経年変化（日平均値の年間 2%除外値）を図 2.3.19 に示す。

平成 25 年度は環境基準を達成している。平成 25 年度までの過去 5 年間の二酸化硫黄の日平均値の年間 2%除外値は環境基準を下回っており、概ね横ばいで推移している。

表 2.3.11 二酸化硫黄の測定結果（平成 25 年度）

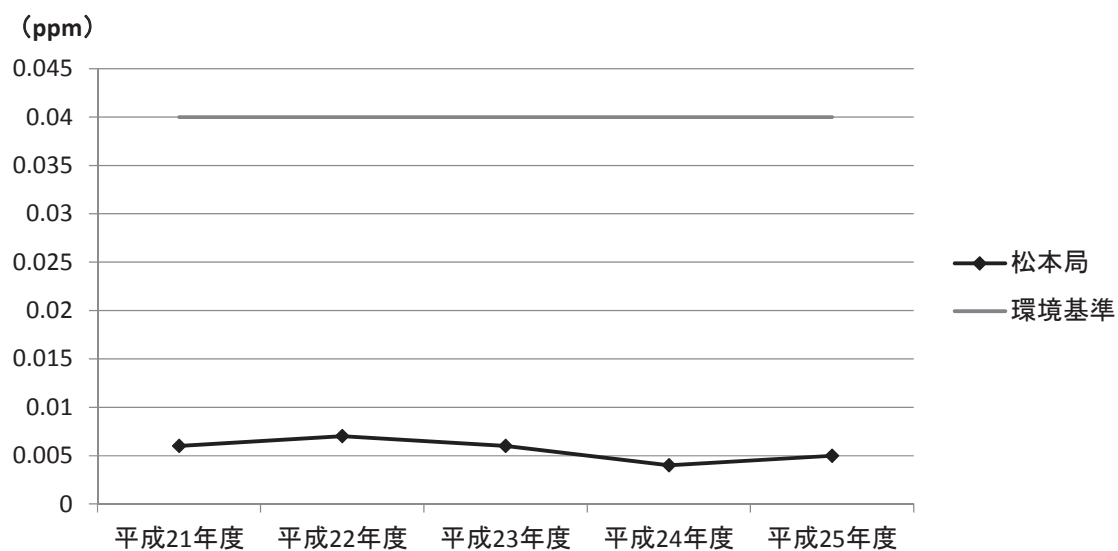
測定局	有効測定日数	測定時間	年平均値	1 時間値が 0.1ppm を超えた時間数とその割合		日平均値が 0.04ppm を超えた日数とその割合		1 時間値の最高値	日平均値の 2% 除外値	日平均値が 0.04ppm を超えた日が 2 日以上連続したことの有無	環境基準の長期的評価による日平均値が 0.04ppm を超えた日数
				時間	%	日	%				
松本局	358	8691	0.003	0	0.0	0	0.0	0.009	0.005	○	0

注) 環境基準による大気汚染の評価方法は以下のとおり。

短期的評価：測定を行った日又は時間について、1 時間値の 1 日平均値若しくは 8 時間平均値又は各 1 時間値を、環境基準と比較して評価を行う。

長期的評価：1 年間の測定を通じて得られた 1 日平均値のうち、高い方から 2% の範囲内にある測定値（365 日分のデータがある場合は 7 日分の測定値）を除外した後の最高値を、環境基準と比較して評価を行う。ただし、1 日平均値につき環境基準を越える日が 2 日以上連続した場合には、非達成と評価する。

出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」（長野県水大気環境課）



出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」（長野県水大気環境課）

図 2.3.19 二酸化硫黄の経年変化（日平均値の年間 2%除外値）

3) 二酸化窒素

安曇野市では市内 4 箇所で簡易測定法である PTIO 法により大気中の窒素酸化物の調査を実施している。平成 26 年度の二酸化窒素の測定結果を表 2.3.12 に、調査地点の位置を図 2.3.20 に示す。

平成 26 年度は 0.007～0.023ppm の範囲で推移している。

また、参考として隣接する松本市及び大町市で長野県が実施している二酸化窒素の測定結果を表 2.3.13 に、平成 21 年度～平成 25 年度の経年変化（日平均値の年間 98% 値）を図 2.3.21 に示す。

平成 25 年度の長野県の結果は、いずれも環境基準を達成している。平成 25 年度までの過去 5 年間の二酸化窒素の日平均値の年間 98% 値は環境基準を下回っている。

表 2.3.12 二酸化窒素の測定結果（安曇野市）

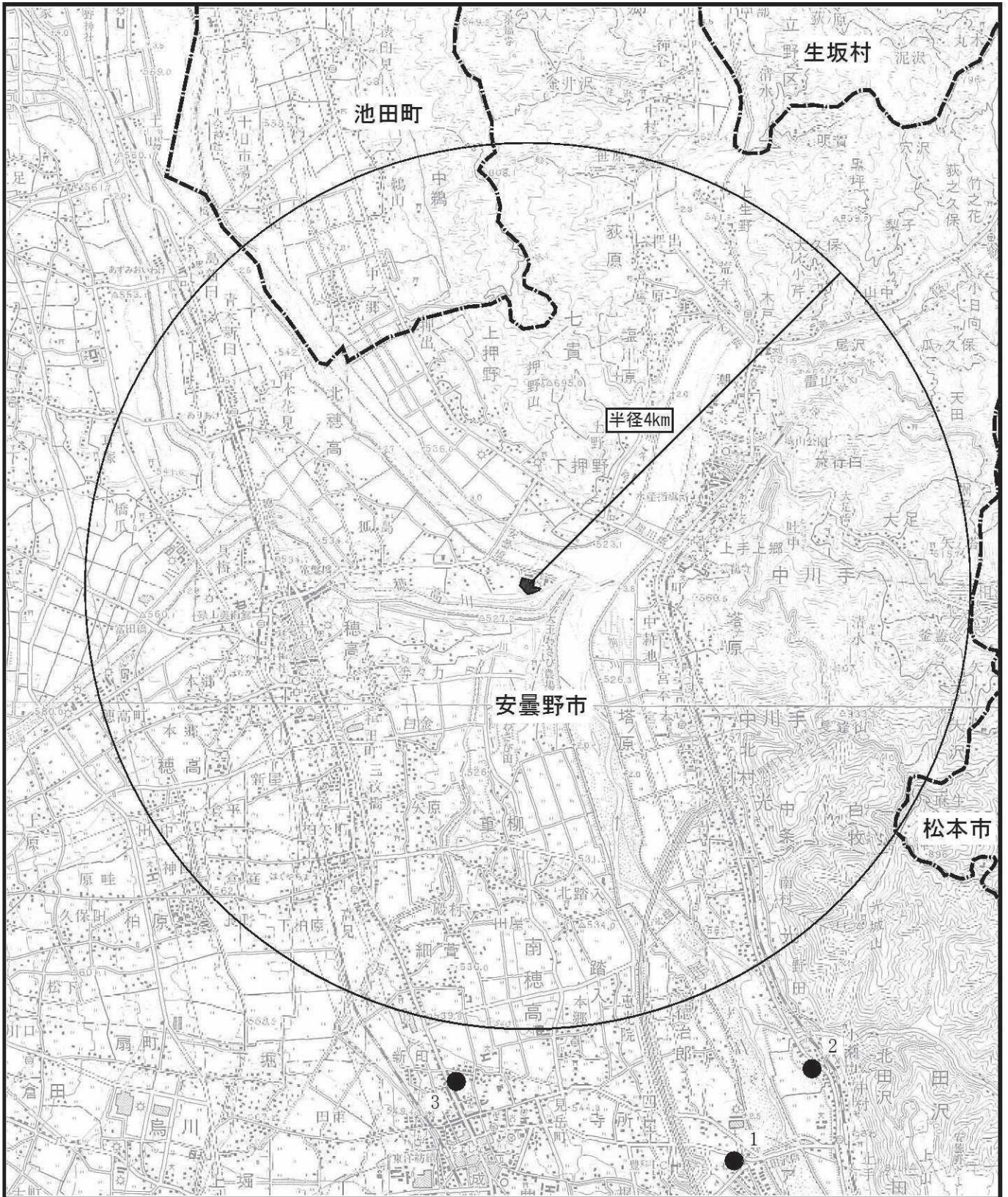
単位：ppm

番号	調査場所	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1	小谷電気(株) 敷地内	0.020	0.013	0.010	0.011	0.010	0.012	0.013	0.017	0.017	0.021	0.022	0.018
2	国道 19 号 JA あづみ 倉庫前	0.021	0.017	0.015	0.013	0.014	0.013	0.015	0.020	0.021	0.022	0.023	0.020
3	王子コンテナ(株) 長野工場 敷地内	0.012	0.009	0.008	0.007	0.008	0.008	0.009	0.013	0.013	0.016	0.014	0.011
4	国道 147 号 アルビコホール前	0.016	0.014	0.012	0.012	0.010	0.012	0.012	0.017	0.016	0.019	0.018	0.016

注 1) PTIO 法(拡散型長期暴露サンプラー)による測定結果。

注 2) 表中の番号は、図 2.3.20 に対応している。ただし、調査地点 4 は表示範囲外。

出典：「平成 26 年度大気中窒素酸化物測定結果」（安曇野市）



凡 例	
	対象事業実施区域
	行政界
	大気中二酸化窒素調査地点

図2.3.20 大気中二酸化窒素調査地点位置図

Scale 1/50,000
0 1,000 2,000 3,000m

この地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図を基に作成した。

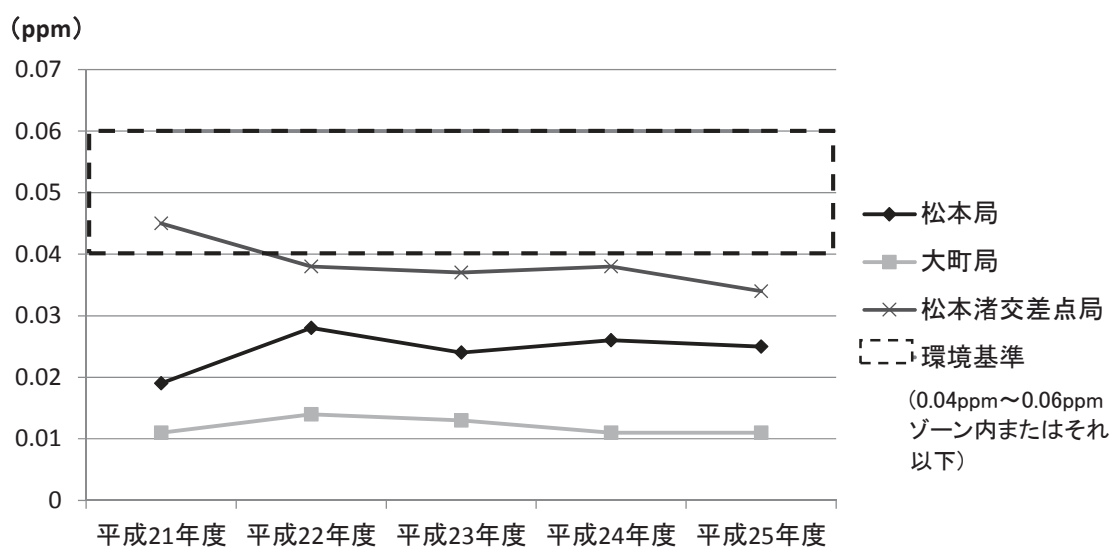
表 2.3.13 二酸化窒素の測定結果（平成 25 年度）

測定局	有効測定日数	測定時間	年平均値	1時間値の最高値	日平均値が0.006ppmを超えた日数とその割合		日平均値が0.04ppm以上0.06ppm以下の日数とその割合		日平均値の年間98%値	98%値評価による日平均値が0.06ppmを超えた日数
	日	時間	ppm	ppm	日	%	日	%	ppm	日
松本局	358	8642	0.009	0.065	0	0.0	1	0.3	0.025	0
大町局	363	8676	0.003	0.036	0	0.0	0	0.0	0.011	0
松本渚交差点局	364	8688	0.019	0.072	0	0.0	4	1.1	0.034	0

注) 環境基準による大気汚染の評価方法は以下のとおり。

長期的評価：1年間の測定を通じて得られた1日平均値のうち、低い方から98%（365日分の測定値がある場合は358番目）に相当する測定値を、環境基準と比較して評価を行う。

出典：「平成25年度大気汚染等測定結果」（長野県水大気環境課）



出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」（長野県水大気環境課）

図 2.3.21 二酸化窒素の経年変化（日平均値の年間 98% 値）

4) 浮遊粒子状物質

隣接する松本市の一般環境大気測定局（松本局）及び自動車排出ガス測定局（松本渚交差点局）における浮遊粒子状物質の測定結果を表 2.3.14 に、平成 21 年度～平成 25 年度の経年変化（日平均値の年間 2%除外値）を図 2.3.22 に示す。

平成 25 年度は環境基準を達成している。平成 25 年度までの過去 5 年間の浮遊粒子状物質の日平均値の年間 2%除外値は環境基準を下回っており、概ね横ばいで推移している。

表 2.3.14 浮遊粒子状物質の測定結果（平成 25 年度）

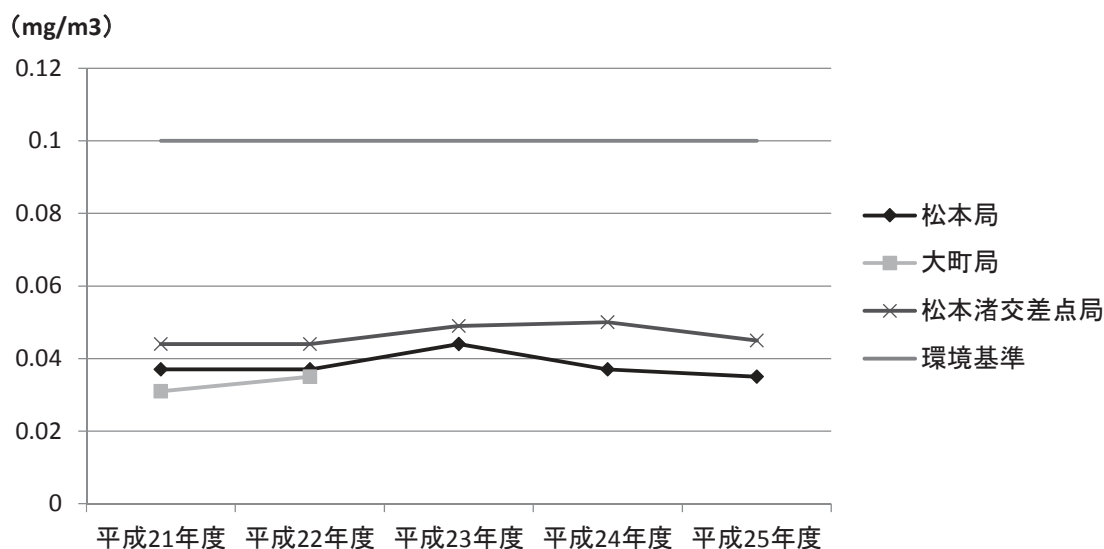
測定局	有効測定日数	測定時間	年平均値	1 時間値が 0.20mg/m ³ を超えた時間数とその割合		日平均値が 0.10mg/m ³ を超えた日数とその割合		1 時間値の最高値	日平均値の 2% 除外値	日平均値が 0.10mg/m ³ を超えた日が 2 日以上連続したことの有無	環境基準の長期的評価による日平均値が 0.10mg/m ³ を超えた日数
				時間	%	日	%				
松本局	358	8574	0.016	0	0.0	0	0.0	0.095	0.035	○	0
松本渚交差点局	360	8674	0.021	0	0.0	0	0.0	0.097	0.045	○	0

注) 環境基準による大気汚染の評価方法は以下のとおり。

短期的評価：測定を行った日又は時間について、1 時間値の 1 日平均値若しくは 8 時間平均値又は各 1 時間値を、環境基準と比較して評価を行う。

長期的評価：1 年間の測定を通じて得られた 1 日平均値のうち、高い方から 2% の範囲内にある測定値（365 日分のデータがある場合は 7 日分の測定値）を除外した後の最高値を、環境基準と比較して評価を行う。ただし、1 日平均値につき環境基準を越える日が 2 日以上連続した場合には、非達成と評価する。

出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」（長野県水大気環境課）



出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」（長野県水大気環境課）

図 2.3.22 浮遊粒子状物質の経年変化（日平均値の年間 2%除外値）

5) 光化学オキシダント

隣接する松本市及び大町市の一般環境大気測定局（松本局及び大町局）における光化学オキシダントの測定結果を表 2.3.15 に、平成 21 年度～平成 25 年度の経年変化（1 時間値の最高値）を図 2.3.23 に示す。

平成 25 年度の環境基準を超過した日数は、松本局では 37 日、大町局では 53 日であり、環境基準を達成していない。平成 25 年度までの過去 5 年間の浮遊粒子状物質の 1 時間値の最高値は環境基準を超過しており、いずれの年度においても環境基準を達成していない。

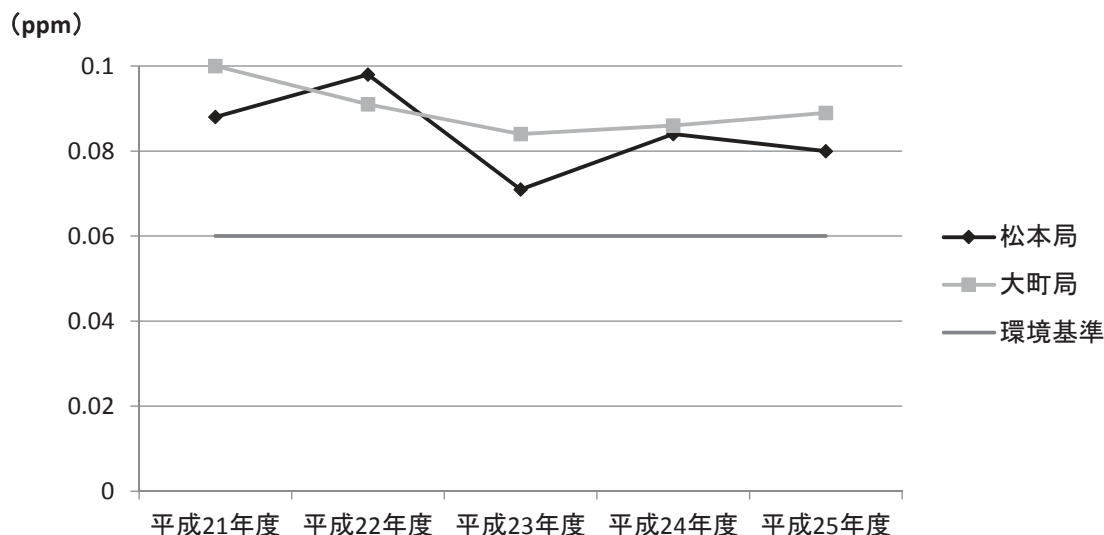
表 2.3.15 光化学オキシダントの測定結果（平成 25 年度）

測定局	昼間の測定日数	昼間の測定時間	昼間の 1 時間値の年平均値	昼間の 1 時間値が 0.06ppm を超えた日数と時間数		昼間の 1 時間値が 0.12ppm 以上の日数と時間数		昼間の 1 時間値の最高値
	日	時間	ppm	日	時間	日	時間	ppm
松本局	353	5237	0.032	37	155	0	0	0.080
大町局	365	5455	0.037	53	269	0	0	0.089

注) 環境基準による大気汚染の評価方法は以下のとおり。

短期的評価：1 時間値の年間最高値を環境基準と比較して評価する。

出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」（長野県水大気環境課）



出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」（長野県水大気環境課）

図 2.3.23 光化学オキシダントの経年変化（1 時間値の最高値）

6) 炭化水素

隣接する松本市の一般環境大気測定局（松本局）における炭化水素の測定結果を表 2.3.16 に、平成 23 年度～平成 25 年度の経年変化（午前 6 時から 9 時までの 3 時間平均値）を図 2.3.24 に示す。

炭化水素に環境基準は設定されていないが、光化学オキシダントの生成防止のため、非メタン炭化水素に指針値（S51.8.13 通知）が設定されている。平成 25 年度は指針値を超過した日数が 2 日であり、指針値を達成していない。

平成 25 年度までの過去 3 年間の非メタン炭化水素の午前 6 時から 9 時までの 3 時間平均値は概ね横ばいで推移している。

表 2.3.16 (1) 非メタン炭化水素の測定結果（平成 25 年度）

測定局	測定時間	年平均値	6 時～9 時における年平均値	6 時～9 時の測定日数	6 時～9 時の 3 時間平均値		6 時～9 時の 3 時間平均値が 0.20ppmC を超えた日数とその割合		6 時～9 時の 3 時間平均値が 0.31ppmC を超えた日数とその割合	
	時間	ppmC	ppmC	日	最高値 ppmC	最低値 ppmC	日	%	日	%
松本局	8049	0.11	0.12	334	0.35	0.03	13	3.9	2	0.6

出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」（長野県水大気環境課）

表 2.3.16 (2) メタンの測定結果（平成 25 年度）

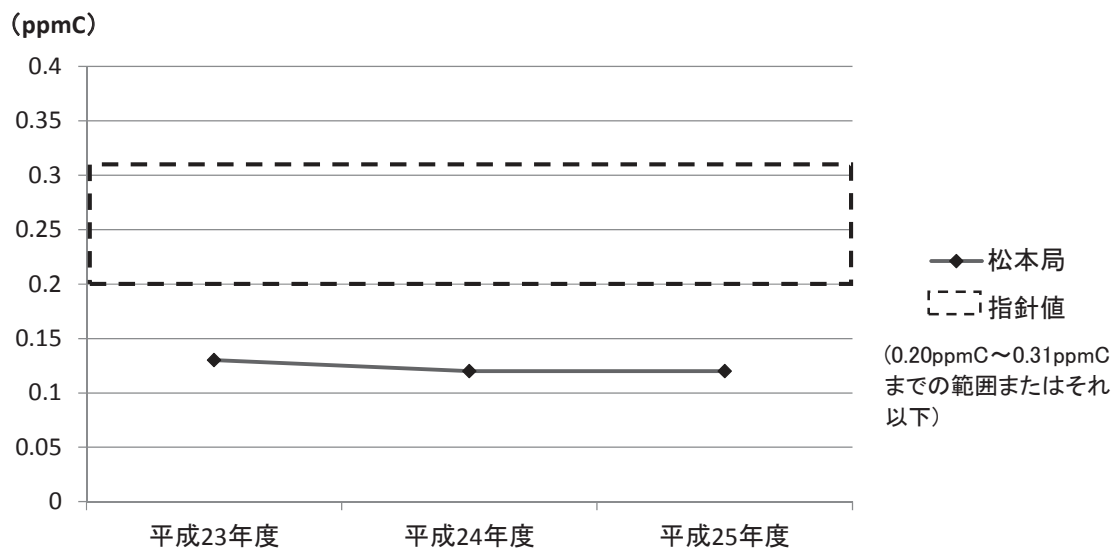
測定局	測定時間	年平均値	6 時～9 時における年平均値	6 時～9 時の測定日数	6 時～9 時の 3 時間平均値	
	時間	ppmC	ppmC	日	最高値 ppmC	最低値 ppmC
松本局	8049	1.93	1.96	334	2.34	1.76

出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」（長野県水大気環境課）

表 2.3.16 (3) 全炭化水素の測定結果（平成 25 年度）

測定局	測定時間	年平均値	6 時～9 時における年平均値	6 時～9 時の測定日数	6 時～9 時の 3 時間平均値	
	時間	ppmC	ppmC	日	最高値 ppmC	最低値 ppmC
松本局	8049	2.04	2.08	334	2.50	1.82

出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」（長野県水大気環境課）



出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」(長野県水大気環境課)

図 2.3.24 非メタン炭化水素の経年変化 (午前 6 時から 9 時までの 3 時間平均値)

7) 微小粒子状物質

隣接する松本市の一般環境大気測定局(松本局)及び自動車排出ガス測定局(松本渚交差点局)における微小粒子状物質の測定結果を表 2.3.17 に、平成 22 年度～平成 25 年度の経年変化(年平均値及び日平均値の 98%値)を図 2.3.25 に示す。

平成 25 年度は環境基準を達成している。平成 25 年度までの過去 4 年間の微小粒子状物質の年平均値、日平均値の 98%値はいずれも環境基準を下回っており、概ね横ばいで推移している。

表 2.3.17 微小粒子状物質の測定結果 (平成 25 年度)

測定局	有効測定日数	測定時間	年平均値	日平均値の最高値	日平均値が $35 \mu\text{g}/\text{m}^3$ を超えた日数とその割合		1 時間値の最高値	日平均値の年間 98%値	環境基準(短期基準)の長期的評価(98%値)による日平均値が $35 \mu\text{g}/\text{m}^3$ を超えた日数
	日	時間	$\mu\text{g}/\text{m}^3$	$\mu\text{g}/\text{m}^3$	日	%	$\mu\text{g}/\text{m}^3$	$\mu\text{g}/\text{m}^3$	日
松本局	362	8717	11.1	44.7	1	0.3	160	26.3	0
松本渚交差点局	331	8190	10.8	37.9	1	0.3	64	26.1	0

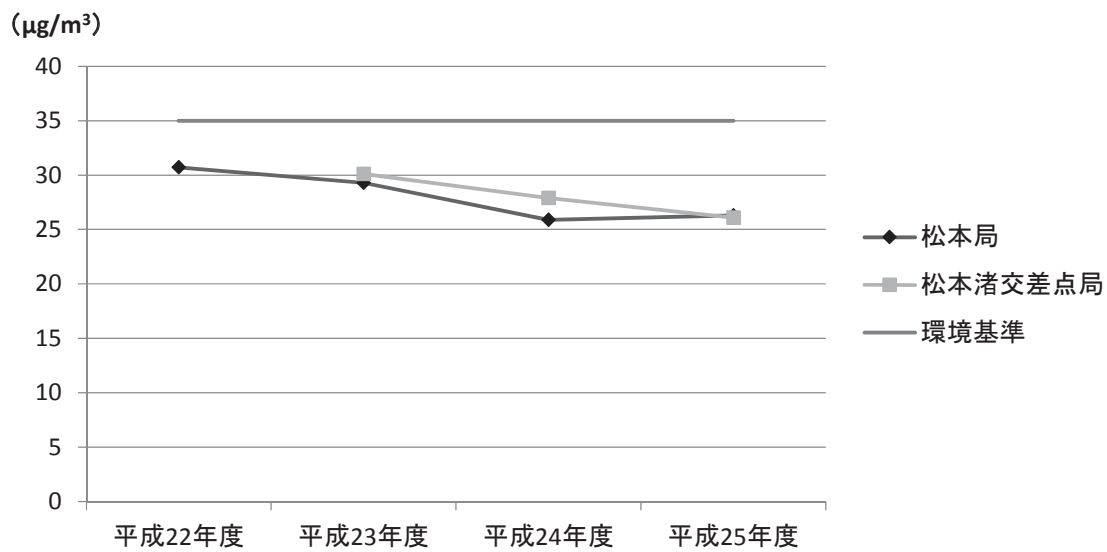
注) 環境基準による大気汚染の評価方法は以下のとおり。

長期的評価：微小粒子状物質の暴露濃度分布全体を平均的に低減する意味での長期基準と、暴露濃度分布のうち高濃度の出現を減少させる意味での短期基準の両者について、長期的評価を行う。

長期基準に関する評価：測定結果の 1 年平均値を長期基準(1 年平均値)と比較する。

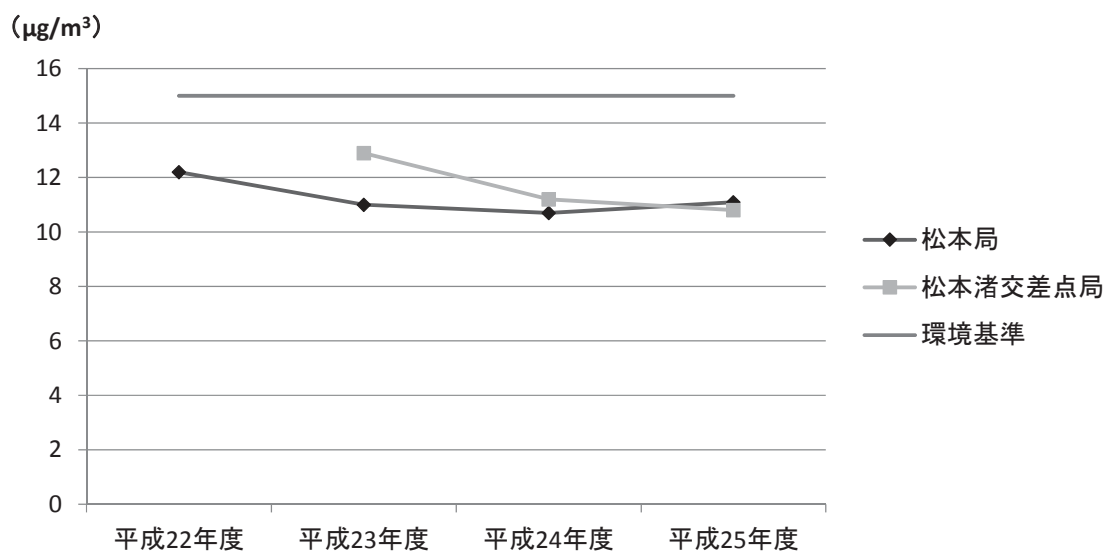
短期基準に関する評価：測定結果の 1 日平均値のうち年間 98 パーセントタイル値を代表値として選択して、これを短期基準と比較(1 日平均値)と比較する。

出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」(長野県水大気環境課)



出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」(長野県水大気環境課)

図 2.3.25 (1) 微小粒子状物質の経年変化 (年平均値)



出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」(長野県水大気環境課)

図 2.3.25 (2) 微小粒子状物質の経年変化 (日平均値の 98%値)

8) 一酸化炭素

隣接する松本市の自動車排出ガス測定局（松本渚交差点局）における一酸化炭素の測定結果を表 2.3.18 に、平成 21 年度～平成 25 年度の経年変化（日平均値の年間 2% 除外値）を図 2.3.26 に示す。

平成 25 年度は環境基準を達成している。平成 25 年度までの過去 5 年間の一酸化炭素の年平均値は環境基準を下回っており、概ね横ばいで推移している。

表 2.3.18 (1) 一酸化炭素の測定結果 (平成 25 年度)

測定局	有効測定 日数	測定時間	年平均値	8時間値が20ppm を超えた回数とそ の割合		日平均値が 10ppmを超えた 日数とその割合		1時間値が30ppm 以上となった日数 とその割合	
	日	時間	ppm	回	%	日	%	日	%
松本渚 交差点局	364	8717	0.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0

注) 環境基準による大気汚染の評価方法は以下のとおり。

短期的評価: 測定を行った日又は時間について、1時間値の1日平均値若しくは8時間平均値又は各1時間値を、環境基準と比較して評価を行う。

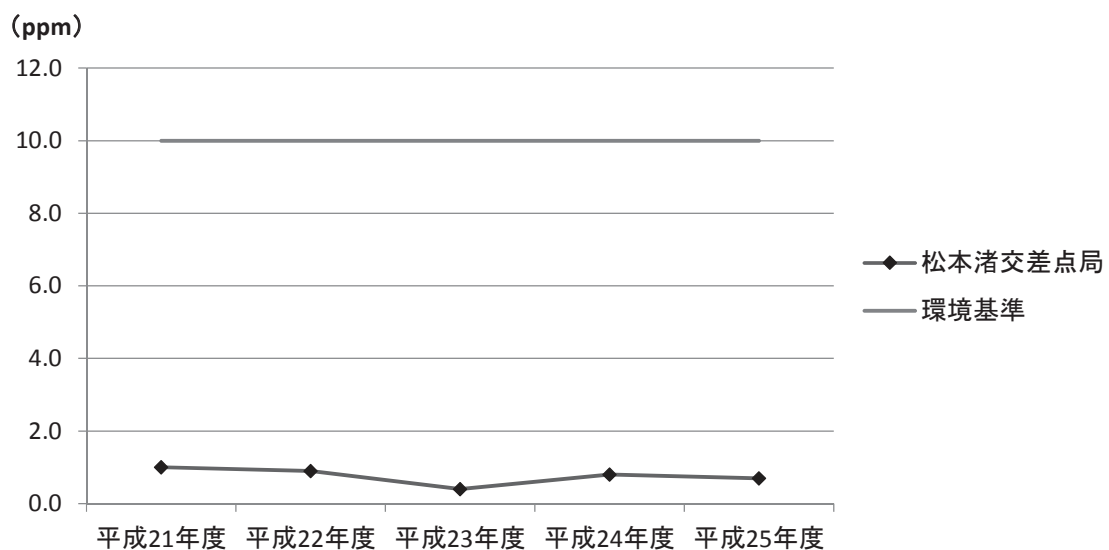
長期的評価: 1年間の測定を通じて得られた1日平均値のうち、高い方から2%の範囲内にある測定値(365日分のデータがある場合は7日分の測定値)を除外した後の最高値を、環境基準と比較して評価を行う。ただし、1日平均値につき環境基準を越える日が2日以上連続した場合には、非達成と評価する。

出典: 「平成 25 年度大気汚染等測定結果」(長野県水大気環境課)

表 2.3.18 (2) 一酸化炭素の測定結果 (平成 25 年度)

測定局	1時間値 の最高値	日平均値 の年間2% 除外値	日平均値が 10ppmを超えた 日が2日以上連 続したことの有無	環境基準の長期評 価による日平均値が 10ppmを超えた日数
	ppm	ppm	有×・無○	日
松本渚 交差点局	2.0	0.7	○	0

出典: 「平成 25 年度大気汚染等測定結果」(長野県水大気環境課)



出典: 「平成 25 年度大気汚染等測定結果」(長野県水大気環境課)

図 2.3.26 一酸化炭素の経年変化 (日平均値の年間 2%除外値)

9) 有害大気汚染物質

隣接する松本市の一般環境大気測定局（松本局）及び自動車排出ガス測定局（松本渚交差点局）における有害大気汚染物質の測定結果を表 2.3.19 に示す。

平成 25 年度は環境基準または指針値の設定されているいずれの有害大気汚染物質も基準値を達成している。

表 2.3.19 有害大気汚染物質の測定結果（平成 25 年度）

	単位	年平均値		環境基準等
		松本局	松本渚 交差点局	
アクリロニトリル	μ g/m ³	0.047	—	2 ^{注2}
アセトアルデヒド	μ g/m ³	—	4.0	—
塩化ビニルモノマー	μ g/m ³	0.0079	0.048	10 ^{注2}
塩化メチル	μ g/m ³	1.3	1.4	—
クロム及びその化合物	ng/m ³	1.7	—	—
クロロホルム	μ g/m ³	0.18	0.34	18 ^{注2}
1,2-ジクロロエタン	μ g/m ³	0.14	0.25	1.6 ^{注2}
ジクロロメタン	μ g/m ³	1.2	4.4	150 ^{注1}
水銀及びその化合物	ng/m ³	1.9	—	40 ^{注2}
テトラクロロエチレン	μ g/m ³	0.30	0.33	200 ^{注1}
トリクロロエチレン	μ g/m ³	0.52	0.44	200 ^{注1}
トルエン	μ g/m ³	2.1	6.6	—
ニッケル化合物	ng/m ³	1.6	—	25 ^{注2}
ヒ素及びその化合物	ng/m ³	0.90	—	6 ^{注2}
1,3-ブタジエン	μ g/m ³	0.085	0.30	2.5 ^{注2}
ベリリウム及びその化合物	ng/m ³	0.018	—	—
ベンゼン	μ g/m ³	0.75	1.4	3 ^{注1}
ホルムアルデヒド	μ g/m ³	—	2.1	—
マンガン及びその化合物	ng/m ³	11	—	140 ^{注2}
1,1,1,2-テトラフルオロエタン	μ g/m ³	0.50	0.60	—
クロロジフルオロメタン	μ g/m ³	1.2	1.9	—
1-クロロ-1,1-ジフルオロメタン	μ g/m ³	0.13	0.21	—
2,2-ジクロロ-1,1,1-トリフルオロメタン	μ g/m ³	0.030	0.11	—
1,1-ジクロロ-1-フルオロエタン	μ g/m ³	0.20	0.35	—
3,3-ジクロロ-1,1,1,2,2-ペンタフルオロプロパン	μ g/m ³	0.0068	0.14	—
1,3-ジクロロ-1,1,2,2,3-ペンタフルオロプロパン	μ g/m ³	0.049	0.17	—
テトラクロロメタン	μ g/m ³	0.63	0.76	—
臭化メチル	μ g/m ³	0.052	0.12	—
<i>o</i> -キシレン	μ g/m ³	0.34	0.77	—
<i>m,p</i> -キシレン	μ g/m ³	0.40	0.87	—
スチレン	μ g/m ³	0.21	0.64	—
エチルベンゼン	μ g/m ³	0.67	1.1	—

注 1) 大気汚染に係る環境基準（平成 9 年 2 月 4 日 環告 4）

注 2) 有害大気汚染物質の指針値（平成 15 年 9 月 30 日 環管総発 030930004）、（平成 18 年 12 月 20 日 環水大総第 061220001 号）、（平成 22 年 10 月 15 日 環水大総発第 101015002 号）、（平成 22 年 10 月 15 日 環水大総発第号 101015004）、（平成 26 年 5 月 1 日 環水大総発第 1405011 号）

注 3) 松本渚交差点局のアセトアルデヒド及びホルムアルデヒドの測定結果は平成 24 年度測定分。

出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」（長野県水大気環境課）

10) ダイオキシン類

安曇野市では市が市内 6 箇所で、本組合が 4 箇所で、それぞれ大気中のダイオキシン類の測定を実施している。平成 26 年度の安曇野市が実施したダイオキシン類の測定結果及び平成 26 年度の本組合が実施したダイオキシン類の調査結果を表 2.3.20 に示す。本組合の調査結果については、過去 10 年間(隔年調査)の経年変化を図 2.3.27 に示す。また、安曇野市及び本組合で実施した調査の調査地点の位置を図 2.3.28 に示す。

平成 26 年度はいずれの地点においても環境基準を達成している。

なお、参考までに隣接する松本市で長野県が実施しているダイオキシン類の測定結果を表 2.3.21 に示す。

平成 25 年度の安曇野市及び長野県の結果は、いずれも環境基準を達成している。平成 25 年度までの過去 5 年間のダイオキシン類は環境基準を下回っており、概ね横ばいで推移している。

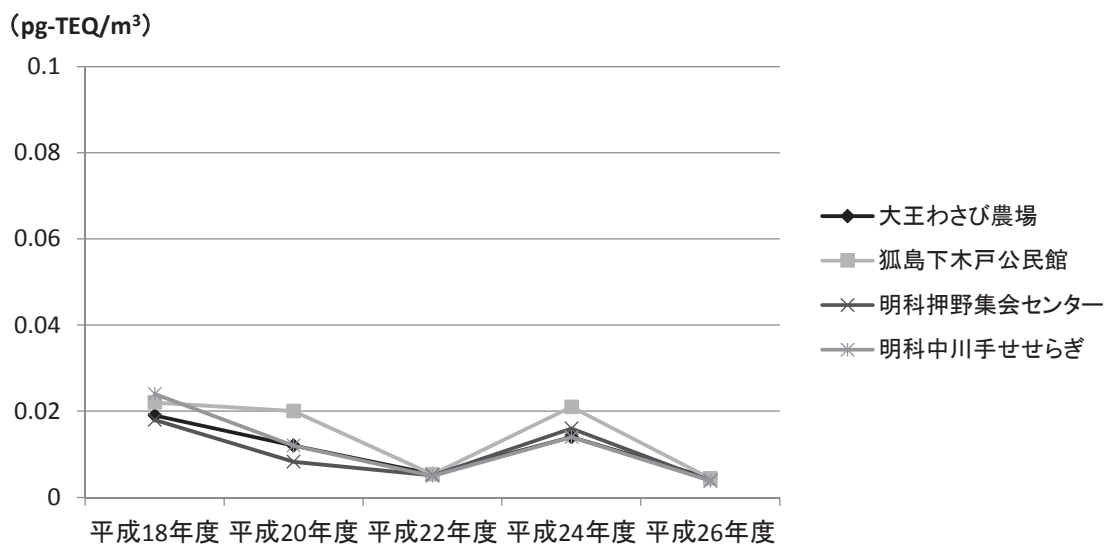
表 2.3.20 大気中ダイオキシン類の測定結果 (安曇野市内)

(単位 : pg-TEQ/m³)

実施主体	番号	調査地点	調査結果	環境基準
安曇野市	1	塔ノ原上水道揚水場(明科塔ノ原)	0.011	0.6
	2	安曇野市立豊科東小学校(豊科田沢)	0.0055	
	3	信濃教育会生涯学習センター(豊科高家)	0.0058	
	4	安曇野市立穂高北小学校(穂高有明)	0.0043	
	5	安曇野市立穂高西小学校(穂高)	0.0044	
	6	三枚橋公園(穂高)	0.0059	
穂高広域施設組合	1	大王わさび農場	0.0044	
	2	狐島下木戸公民館	0.0044	
	3	明科押野集会センター	0.0039	
	4	明科中川手せせらぎ	0.0039	

注) 表中の番号は、図 2.3.28 に対応している。ただし、調査地点 3(安曇野市実施分)は表示範囲外。

出典 : 「平成 26 年度 大気中ダイオキシン類調査結果」(安曇野市)



注 1) 大気中のダイオキシン類の環境基準は 0.6pg-TEQ/m³。

注 2) 調査は隔年で実施。

図 2.3.27 大気中ダイオキシン類濃度の経年変化

表 2.3.21 大気中ダイオキシン類の測定結果 (平成 25 年度)

(pg-TEQ/m ³)					
測定局	6月～1月	6月	8月	11月	1月
松本局	0.013	0.013	0.086	0.017	0.013
環境基準	0.6				

出典：「平成 25 年度大気汚染等測定結果」(長野県水大気環境課)

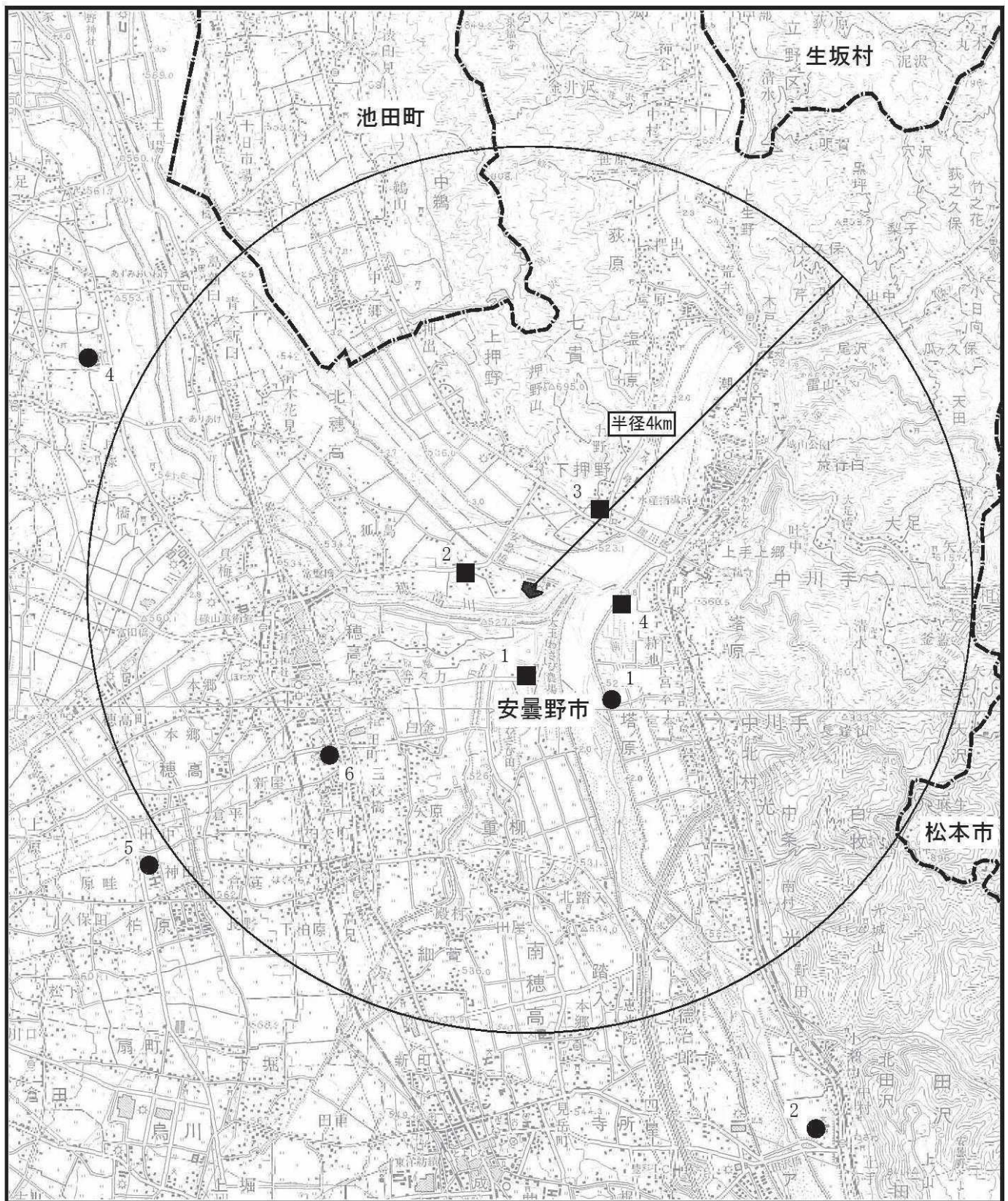




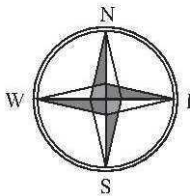



図2.3.28 大気中ダイオキシン類調査地点位置図

凡 例	
	対象事業実施区域
	行政界
	大気中ダイオキシン類調査地点 (安曇野市調査)
	大気中ダイオキシン類調査地点 (本組合調査)



Scale 1/50,000



この地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図を基に作成した。

(3) 騒音

安曇野市では市内 9 地点で自動車騒音の調査を実施している。平成 26 年度の自動車騒音の状況を表 2.3.22 に、騒音調査地点の位置図を図 2.3.29 に示す。

自動車交通騒音に係る地域の類型指定のある 4 地点のうち環境基準を達成しているのは 3 地点である。要請限度については 4 地点とも要請限度を超えていない。

表 2.3.22 自動車交通騒音調査結果

番号	調査地点	等価騒音レベル (dB)		環境基準 (dB)			要請限度 (dB)		
		昼	夜	地域の 類型	昼間	夜間	区域の 区分	昼間	夜間
1	豊科 豊科 IC 西側	69	67	A ^{注2}	70	65	a 区域 ^{注3}	75	70
2	豊科 王子製紙南側	68	63	B ^{注2}	70	65	b 区域 ^{注3}	75	70
3	穂高 広域農道	70	64	C ^{注1}	65	60	c 区域	75	70
4	穂高 国道 147 号	70	64	B ^{注2}	70	65	b 区域 ^{注3}	75	70
5	穂高 高瀬川道路	72	67	なし	—	—	なし	—	—
6	三郷 ビッグ周辺	70	66	なし	—	—	なし	—	—
7	堀金 ベイシア周辺	71	65	なし	—	—	なし	—	—
8	明科 国道 19 号	70	68	なし	—	—	c 区域 ^{注3}	75	70
9	豊科 光橋周辺	68	61	なし	—	—	なし	—	—

注 1)「道路に面する地域」に該当。

注 2)「幹線交通を担う道路に近接する空間」に該当。

注 3)「幹線交通を担う道路に近接する区域」に該当。

注 4)表中の番号は、図 2.3.29 に対応している。ただし、調査地点 6 は表示範囲外。

出典:「平成 26 年度自動車交通騒音調査結果」(安曇野市)

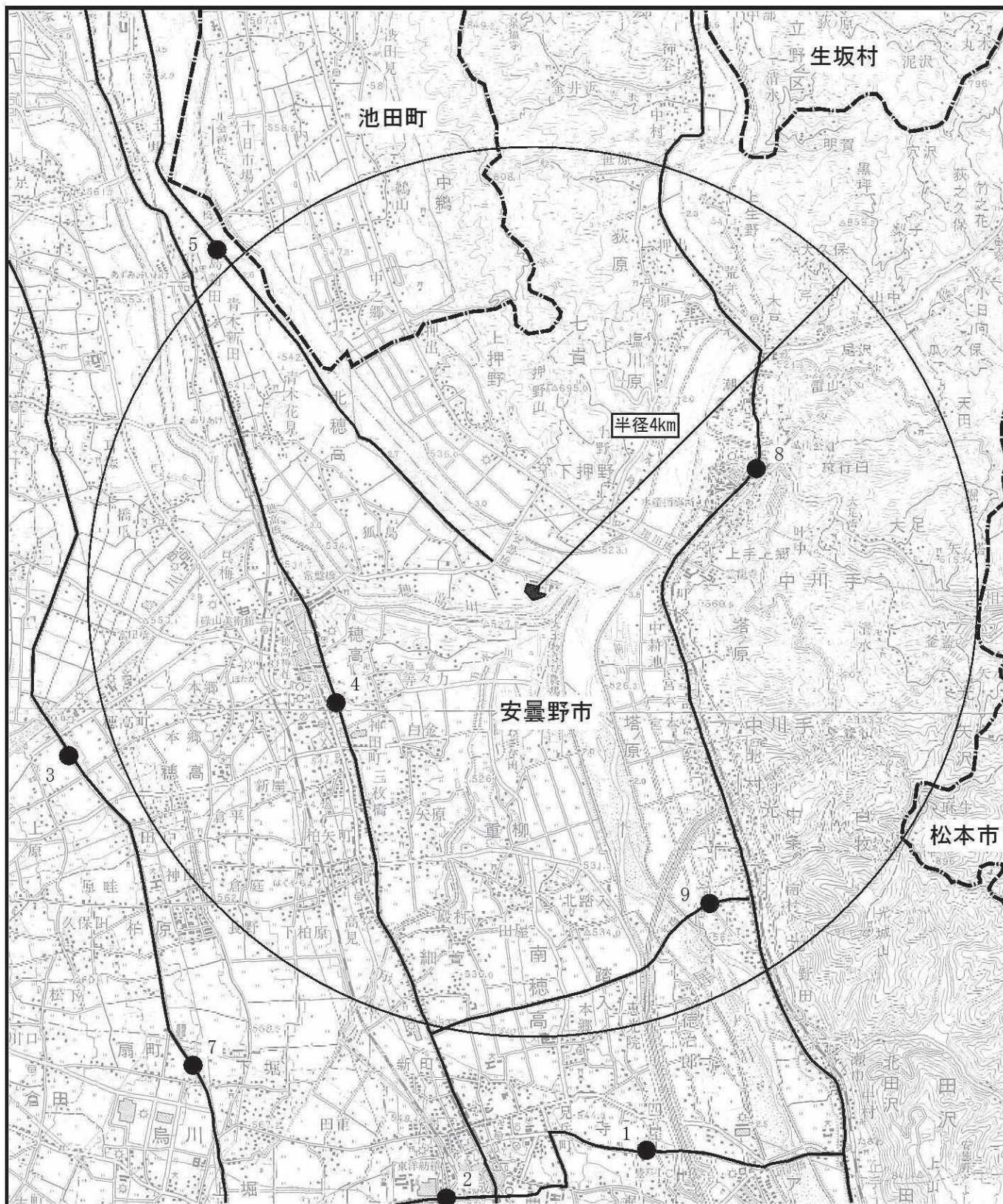
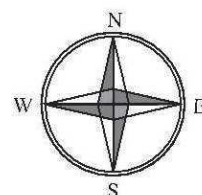


図2.3.29 騒音調査地点位置図

凡 例

- 対象事業実施区域
- 行政界
- 騒音調査地点
- 調査対象路線



この地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図を基に作成した。

(4) 振動

対象事業実施区域及びその周囲では、現時点で振動に関する既存資料はない。

(5) 低周波音

対象事業実施区域及びその周囲では、現時点で低周波音に関する既存資料はない。

(6) 悪臭

対象事業実施区域及びその周囲では、現時点で悪臭に関する既存資料はない。

(7) 水質

安曇野市は、河川及び主要な水路の水質検査を実施している。水質調査の結果を表 2.3.23 に、調査地点位置図を図 2.3.30 に示す。

長野県では、安曇野市内の流れる河川で水質の常時監視を行っている。水質調査の結果を表 2.3.24 に示す。

平成 26 年度の水質常時監視結果における河川の環境基準の達成状況は、穂高川（想春賦歌碑前）及び高瀬川（高瀬橋）では、浮遊物質（SS）及び大腸菌群数が、犀川（田沢橋）では生物化学的酸素要求量（BOD）及び大腸菌群数が環境基準を達成していない。

表 2.3.23 河川水質調査結果 (安曇野市)

号 番	河川名	地点名	pH	BOD mg/L	SS mg/L	大腸菌群数 MPN/100ml	DO mg/L	T-N mg/L	T-P mg/L
1	潮沢川	明科東川手	8.2	0.9	12	79,000	8.4	1.4	0.11
		犀川河口前	8.2	0.9	4	17,000	10	0.94	0.085
2	会田川	明科中川手	8.3	1.1	8	3,300	8.9	0.96	0.080
		釜蓋橋下流	8.3	0.6	1	3,300	11	0.75	0.043
3	会田川	明科中川手	8.0	0.8	7	110,000	8.3	0.99	0.070
		R19 会田川橋下流	8.4	0.5	1	3,300	10	0.76	0.040
4	中央用水	明科中川手	7.9	1.1	6	49,000	9.1	1.7	0.095
		会田川合流前	8.3	2.5	<1	70,000	12	3.2	0.16
5	内川	明科七貴	7.9	0.7	10	17,000	8.6	0.85	0.084
		池田町境	7.7	<0.5	1	24,000	9.9	0.94	0.072
6	内川	明科七貴	7.8	1.1	7	110,000	8.7	1.0	0.097
		犀川河口前	7.6	0.6	2	4,900	9.6	1.0	0.083
7	前沢	明科中川手	7.7	0.7	7	33,000	9.1	1.6	0.063
		水産試験場前	7.7	0.5	3	24,000	10	1.9	0.037
8	奥沢	豊科光	7.9	0.6	27	79,000	8.2	2.2	0.039
		藤松一郎宅前	8.3	<0.5	2	3,300	9.8	1.7	0.012
9	中曽根川	豊科南穂高	8.1	1.0	14	70,000	8.3	0.73	0.085
		ビレッジ安曇野前	8.1	0.8	3	4,600	9.7	0.67	0.043
10	重光堰	豊科田沢	7.9	0.7	6	17,000	9.2	0.73	0.043
		アケアピア東水路	7.6	0.7	1	490	10	1.3	0.043
11	穂高川	穂高北穂高	7.3	<0.5	6	13,000	8.7	1.1	0.049
		三川合流	7.2	0.9	3	12,000	9.1	1.4	0.048
12	天満川	穂高有明	7.0	0.6	9	40,000	8.7	0.50	0.035
		梶花見橋上流	7.1	0.6	2	5,400	10	0.43	0.013
13	権田川	穂高北穂高	7.0	1.1	4	31,000	8.4	1.9	0.059
		穂高川合流手前	6.9	0.7	2	11,000	8.9	1.7	0.055
14	両町幹線	穂高	6.9	0.8	4	24,000	8.1	1.1	0.26
		放流口	6.9	0.9	2	16,000	8.8	1.1	0.22
15	赤川	穂高北穂高	7.2	1.1	3	26,000	8.3	1.8	0.063
		あづみ野ランド北	7.1	0.8	1	9,400	8.6	1.6	0.060
16	拾ヶ堰	穂高	7.6	1.0	4	2,700	9.0	0.50	0.023
		上原橋上流	水質調査は8月のみ実施						
17	矢原堰	穂高	8.2	1.0	4	7,900	9.9	0.47	0.034
		弁天様南	8.1	1.0	3	23,000	11	0.87	0.037
18	欠け川	穂高	7.0	0.7	3	1,200	9.6	1.3	0.059
		下橋下流	7.1	0.7	2	5,000	10	1.1	0.031
19	万水川	穂高	6.8	0.8	5	2,000	8.9	2.0	0.047
		等々力橋上流	6.9	0.7	2	13,000	10	1.8	0.051
20	高瀬川	穂高北穂高	7.4	0.6	8	18,000	8.3	1.5	0.10
		青木花見工業団地排水口下流	7.5	0.6	1	3,100	11	1.2	0.008

注 1) 上段：8月19日採水結果、下段：10月28日採水結果

注 2) 表中の番号は、図 2.3.30 に対応している。

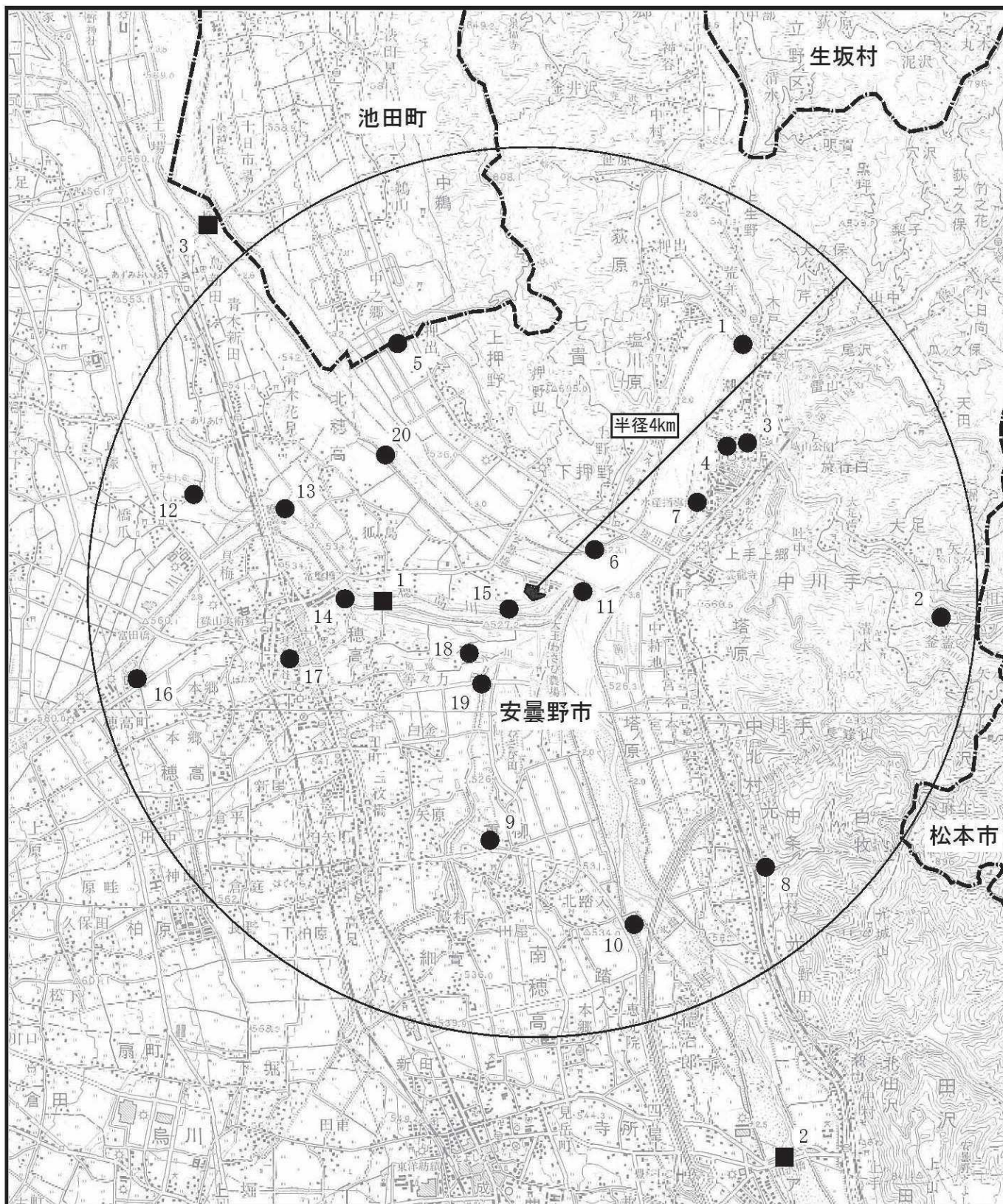
出典：「平成 26 年度 河川及び主要水路水質検査結果」(安曇野市)

表 2.3.24 河川水質結果（公共用水域常時監視結果）

番号	河川名	地点名	類型	年度	BOD mg/L		pH	DO mg/L		SS mg/L		大腸菌群数 MPN/100ml	
					75%値	年平均値	最小値 ～ 最大値	最小値 ～ 最大値	年平均値	最小値 ～ 最大値	年平均値	最小値 ～ 最大値	年平均値
1	穂高川	想春賦歌碑前	AA	22	0.8	0.8	6.8～7.4	8.6～12	11	<1～64	7	13,000～ 490,000	120,000
				23	0.8	0.7	6.7～7.8	9.4～13	11	<1～9	3	17,000～ 94,000	50,000
				24	0.8	0.7	6.9～7.9	9.2～13	11	<1～13	3	7,900～ 130,000	51,000
				25	1.1	0.9	7.6～8.5	8.9～12	10	1～5	3	3,300～ 46,000	16,000
				26	0.6	0.6	7.0～7.6	8.2～13	10	<1～27	5	33,000～ 170,000	78,000
2	犀川	田沢橋	A	22	1.1	1.0	6.4～8.4	8.8～11	9.9	1～33	7	80～ 22,000	3,700
				23	1.2	1.0	7.4～8.2	8.5～11	10	1～94	12	8.0～ 11,000	2,300
				24	2.1	1.6	6.6～7.7	8.3～11	9.9	2～8	4	23～ 3,300	610
				25	1.9	1.4	6.2～7.0	8.7～13	10	2～10	4	17～ 7,900	1,400
				26	2.3	1.6	6.5～7.5	8.6～12	10	1～15	5	33～ 17,000	3,000
3	高瀬川	高瀬橋	A	22	0.6	0.6	7.0～7.5	8.7～12	11	<1～14	3	680～ 330,000	35,000
				23	<0.5	0.5	6.7～7.5	9.0～13	11	1～8	5	240～ 24,000	6,300
				24	0.6	0.6	6.6～8.1	9.3～13	11	<1～5	2	130～ 130,000	51,000
				25	1.2	1.0	7.2～8.1	8.3～11	9.6	<1～11	4	330～ 4,900	1,300
				26	0.6	0.6	7.0～7.4	8.2～11	10	<1～33	5	79～ 33,000	6,000

注) 表中の番号は、図 2.3.30 に対応している。

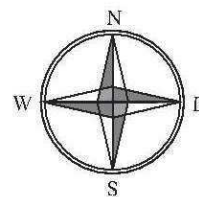
出典：「平成 26 年度 水質、大気及び化学物質測定結果」（平成 27 年 長野県）



凡 例

- 対象事業実施区域
- 行政界
- 水質調査地点 (安曇野市実施)
- 水質調査地点 (長野県実施)

図2.3.30 水質調査地点位置図



Scale 1/50,000
0 1,000 2,000 3,000m

この地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図を基に作成した。

(8) 地下水

安曇野市は、市内の 28 箇所の井戸で年 2 回水質検査を実施している。地下水質調査の内容を表 2.3.25 に、地下水質調査結果を表 2.3.26 に示す。

平成 26 年度は、1 箇所で色度の値が超過していたが、そのほかの地点はいずれも水質基準に関する省令で定める水質基準を達成している。

この他に、安曇野市は三郷地域の 3 箇所の井戸で、硝酸態窒素について年 2 回の調査を続けているが、いずれの調査でも環境基準を達成している。

また、市内の 1 箇所において地下水のトリクロロエチレンについて年 2 回の調査により監視を続けている。

表 2.3.25 地下水質調査項目

調査内容	調査項目
水質分析項目 26 項目 及び VOC(7 箇所)	一般細菌、大腸菌、硝酸態窒素及び亜硝酸態窒素、塩化物イオン 全有機炭素、pH値、味、臭気、色度、濁度、シアン、水銀、鉛、六価クロム カドミウム、ヒ素、フッ素、銅、鉄、マンガン、亜鉛、硬度、蒸発残留物 フェノール類、陰イオン界面活性剤、有機リン、トリクロロエチレン テトラクロロエチレン、1,1,1-トリクロロエタン、シス-1,2-ジクロロエチレン
水質分析項目 10 項目 及び VOC(21 箇所)	一般細菌、大腸菌、硝酸態窒素及び亜硝酸態窒素、塩化物イオン 全有機炭素、pH値、味、臭気、色度、濁度、トリクロロエチレン テトラクロロエチレン、1,1,1-トリクロロエタン、シス-1,2-ジクロロエチレン

出典：「平成 26 年度安曇野市(井水)水質調査報告書」(平成 26 年 安曇野市)

表 2.3.26 (1) 地下水質調査結果 (安曇野市)

測定項目	単位	基準値 ^{注1)}	検体数	最高値	最低値	平均値	不適数
一般細菌	CUF/ml	100	28	79	0	2.8	0
			28	37	0	1.6	0
大腸菌		不検出	28	陰性	陰性	—	0
			28	陰性	陰性	—	0
硝酸態窒素及び 亜硝酸態窒素	mg/L	10	28	7.4	0.3	2.9	0
			28	7.5	0.2	2.7	0
塩化物イオン	mg/L	200	28	17.0	2.0	7.5	0
			28	18.4	2.1	6.9	0
有機物(TOC)	mg/L	5	28	1.0	—	0.3	0
			28	1.0	—	0.2	0
pH		5.8~8.6	28	7.4	6.1	6.6	0
			28	7.2	5.9	6.6	0
色度	度	5	28	14	—	0.5	1
			28	2.2	—	0.7	0
濁度	度	2	28	1.6	—	0.2	0
			28	0.7	—	0.2	0

注 1) 水質基準に関する省令 (平成 15 年 5 月 30 日 厚生労働省令第 101 号)

注 2) 上段：夏期調査結果、下段：冬季調査結果

注 3) —：定量下限値未滿

出典：「平成 26 年度安曇野市(井水)水質調査報告書」(平成 26 年 安曇野市)

表 2.3.26 (2) 地下水質調査結果 (安曇野市)

測定項目 ^{注1)}	単位	基準値 ^{注2)}	検体数	最高値	最低値
鉛	mg/L	0.01	8	0.001	—
			8	—	—
砒素	mg/L	0.01	8	0.001	—
			8	0.002	—
ふっ素	mg/L	0.8	8	0.32	—
			8	0.16	—
銅	mg/L	1.0	8	0.02	—
			8	0.01	—
鉄	mg/L	0.3	8	0.16	—
			8	0.06	—
亜鉛	mg/L	1.0	8	0.007	—
			8	0.015	—
硬度	mg/L	300	8	65	34
			8	81	—
蒸発残留物	mg/L	500	8	150	75
			8	170	—
トリクロロエチレン	mg/L	0.01	28	0.001	—
			28	0.001	—
1,1,1-トリクロロエタン	mg/L	0.3	28	0.002	—
			28	—	—

注 1) 表 2.3.26 に掲載の調査項目のうち、この表に記載のない金属及び有機塩素化合物等の項目についてはすべて定量下限値未満。

注 2) 水質基準に関する省令 (平成 15 年 5 月 30 日 厚生労働省令第 101 号)

注 3) 上段 : 夏期調査結果、下段 : 冬季調査結果

注 4) — : 定量下限値未満

出典 : 「平成 26 年度安曇野市(井水)水質調査報告書」 (平成 26 年 安曇野市)

(9) 土壌汚染

1) ダイオキシン類

本組合では穂高クリーンセンター周辺で土壌中のダイオキシン類の調査を隔年で実施している。平成 27 年度における土壌中のダイオキシン類の調査結果を表 2.3.27 に、調査地点の位置を図 2.3.31 に示す。

平成 27 年度はいずれの地点においても環境基準を達成している。

表 2.3.27 土壌中ダイオキシン類調査結果

番号	調査地点	調査結果	pg-TEQ/g
			環境基準
1	狐島下木戸公民館	6.2	1,000
2	等々力道祖神公園	4.7	
3	高瀬川左岸明科公園	8.3	
4	等々力区大島次川北	5.4	

注) 表中の番号は、図 2.3.31 に対応している。

2) 農用地

安曇野市では、「農用地の土壌の汚染防止等に関する法律」に基づく農用地土壌汚染対策地域の指定を受けている農用地はない。

3) 市街地

安曇野市では、穂高地区の 1 箇所において「土壌汚染対策法」に基づく区域指定が行われている。指定状況を表 2.3.28 に示す。

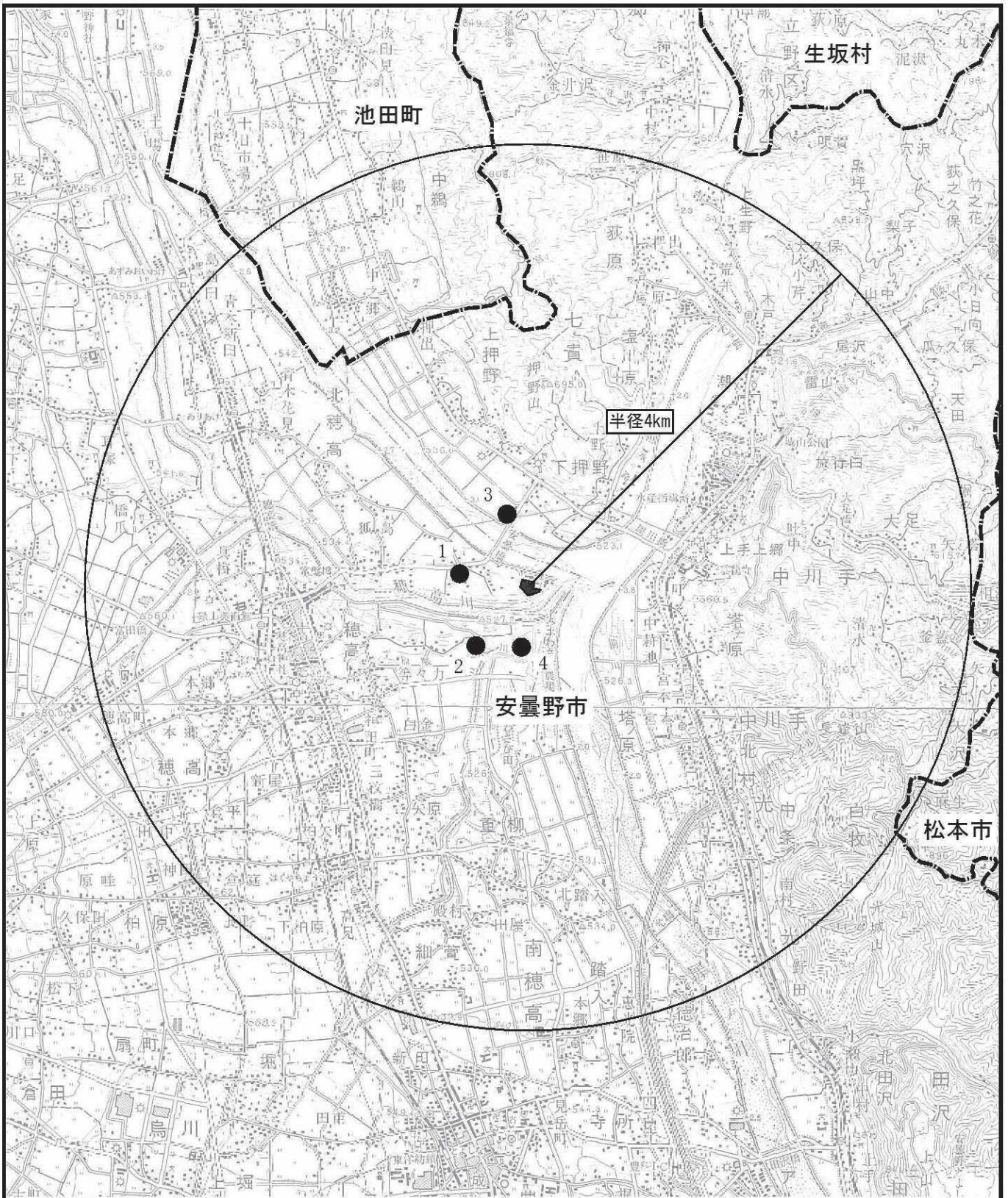
表 2.3.28 土壌汚染対策法区域指定数

整理番号	指定年月日	指定番号	指定区域の所在地	指定区域の面積	指定基準に適合しない特定物質
整-25-1	平成 26 年 1 月 16 日	形-1	長野県安曇野市穂高 の1箇所	1,047m ²	六価クロム化合物 シアン化合物 鉛及びその化合物 ふっ素及びその化合物

出典:長野県ホームページ

(10) 地盤沈下

安曇野市は、「安曇野市地下水の保全・涵養及び適正利用に関する条例」(平成 25 年 3 月 28 日、安曇野市条例第 6 号)を制定し、地下水の資源を保全に取り組んでいる。安曇野市においてはこれまでに地盤沈下の被害は報告されていない。



半径4km

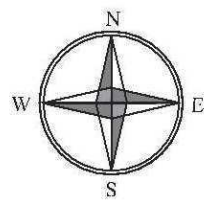
安曇野市

松本市

凡 例

- 対象事業実施区域
- 行政界
- 土壤中ダイオキシン類調査地点

図2.3.31 土壤中ダイオキシン類調査地点位置図



この地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図を基に作成した。